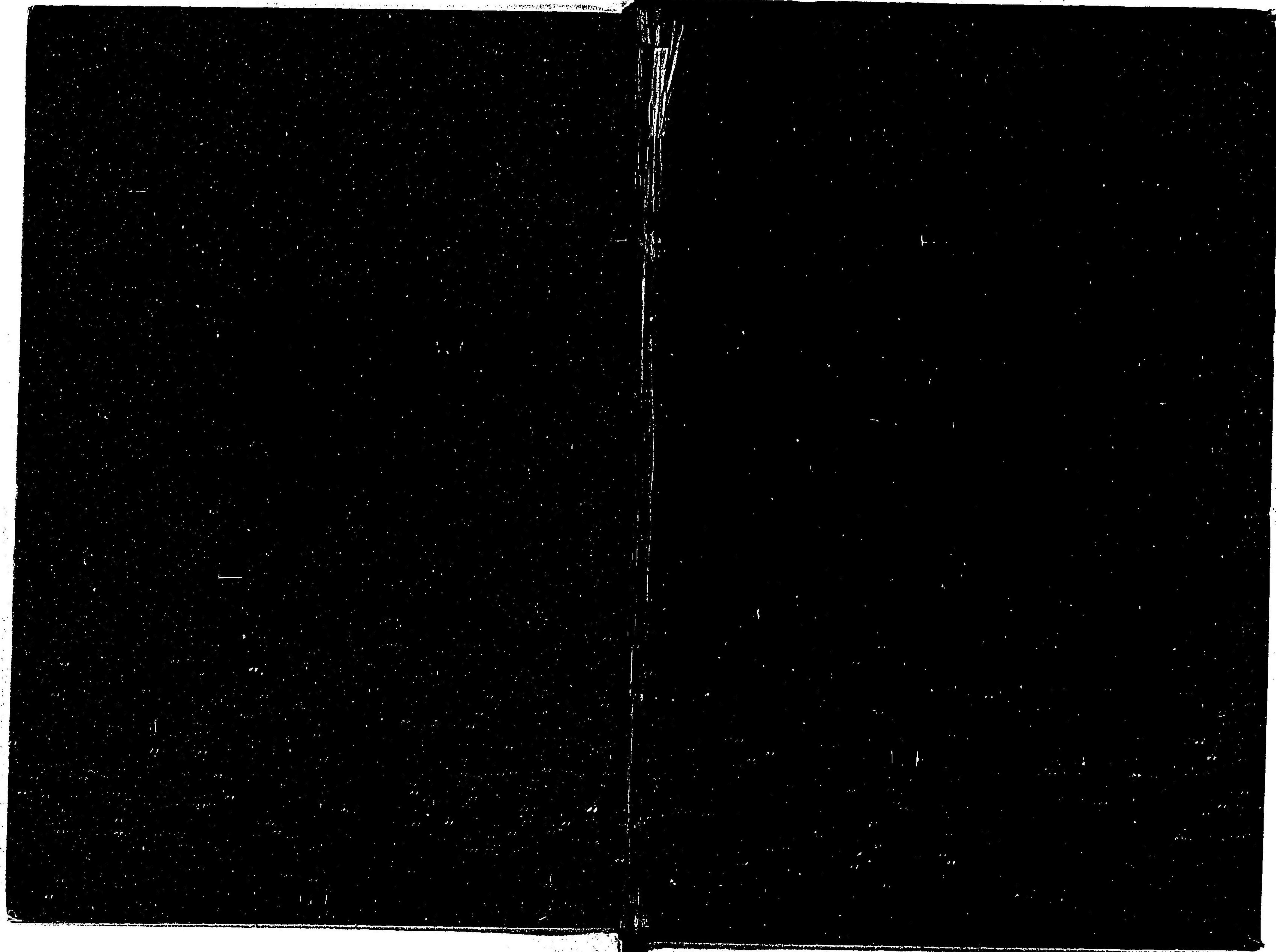


陽  
子  
集



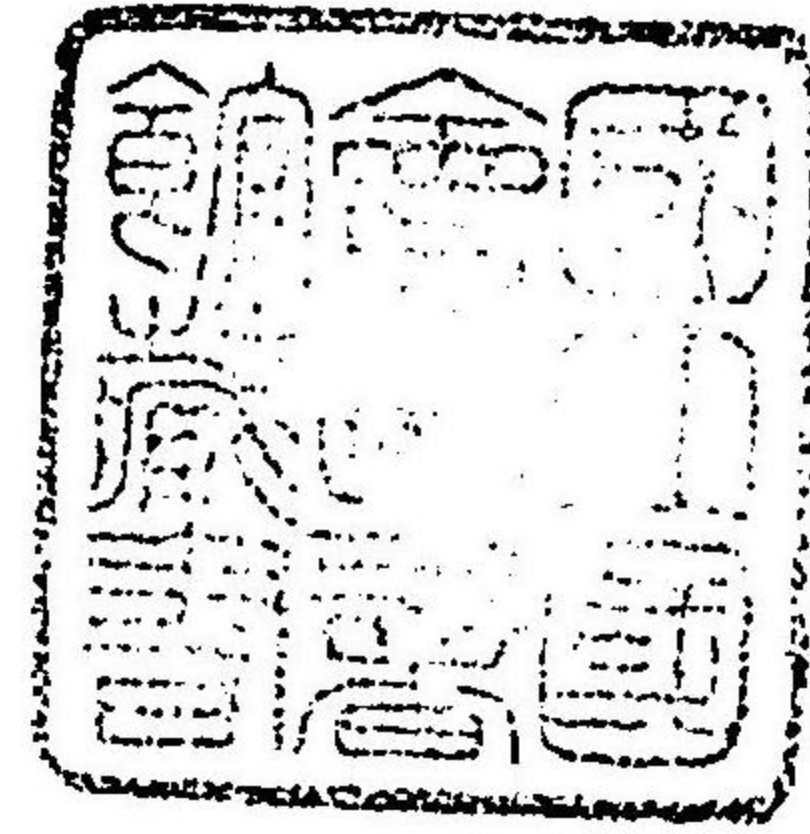




陽  
春  
集

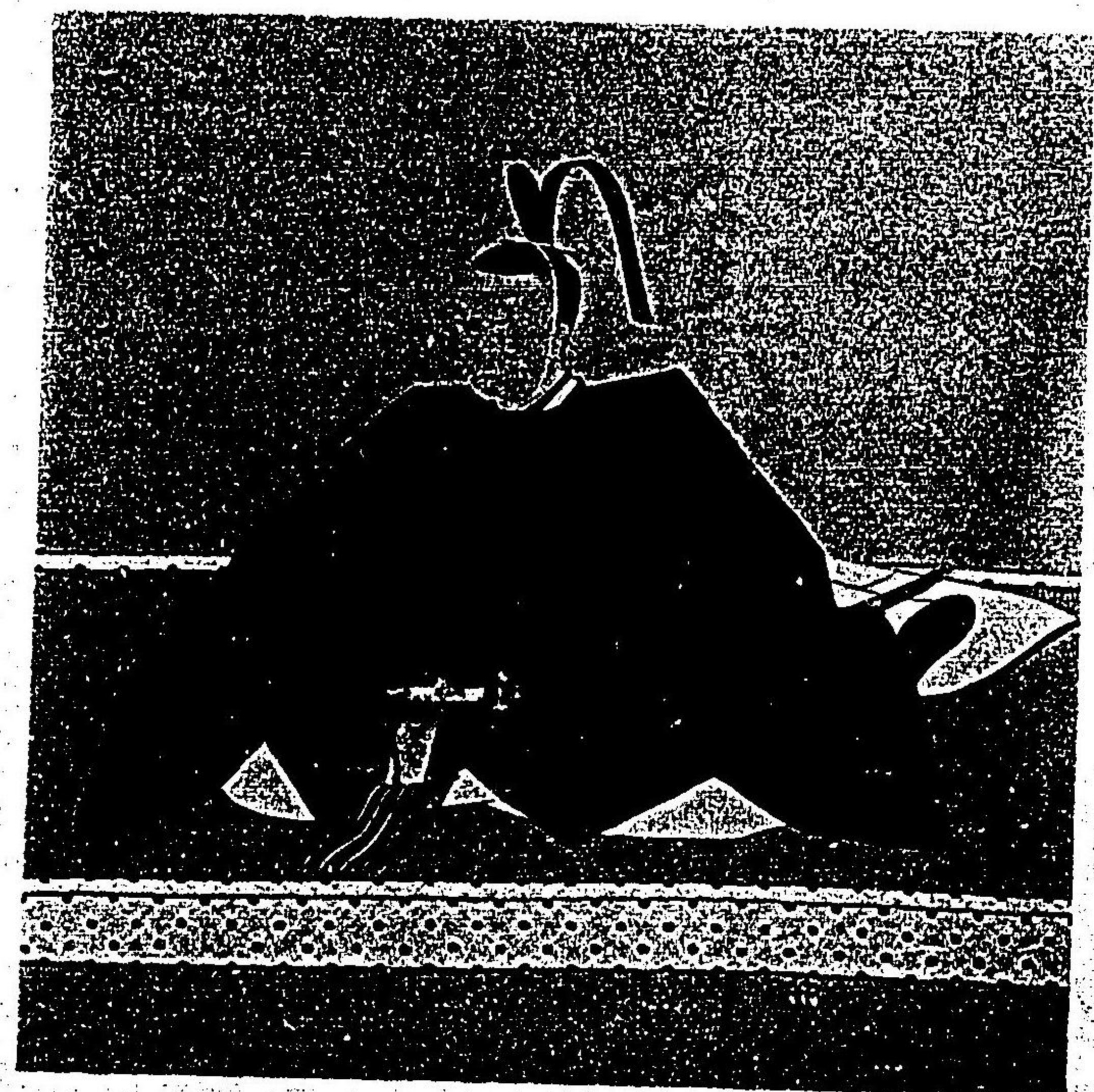
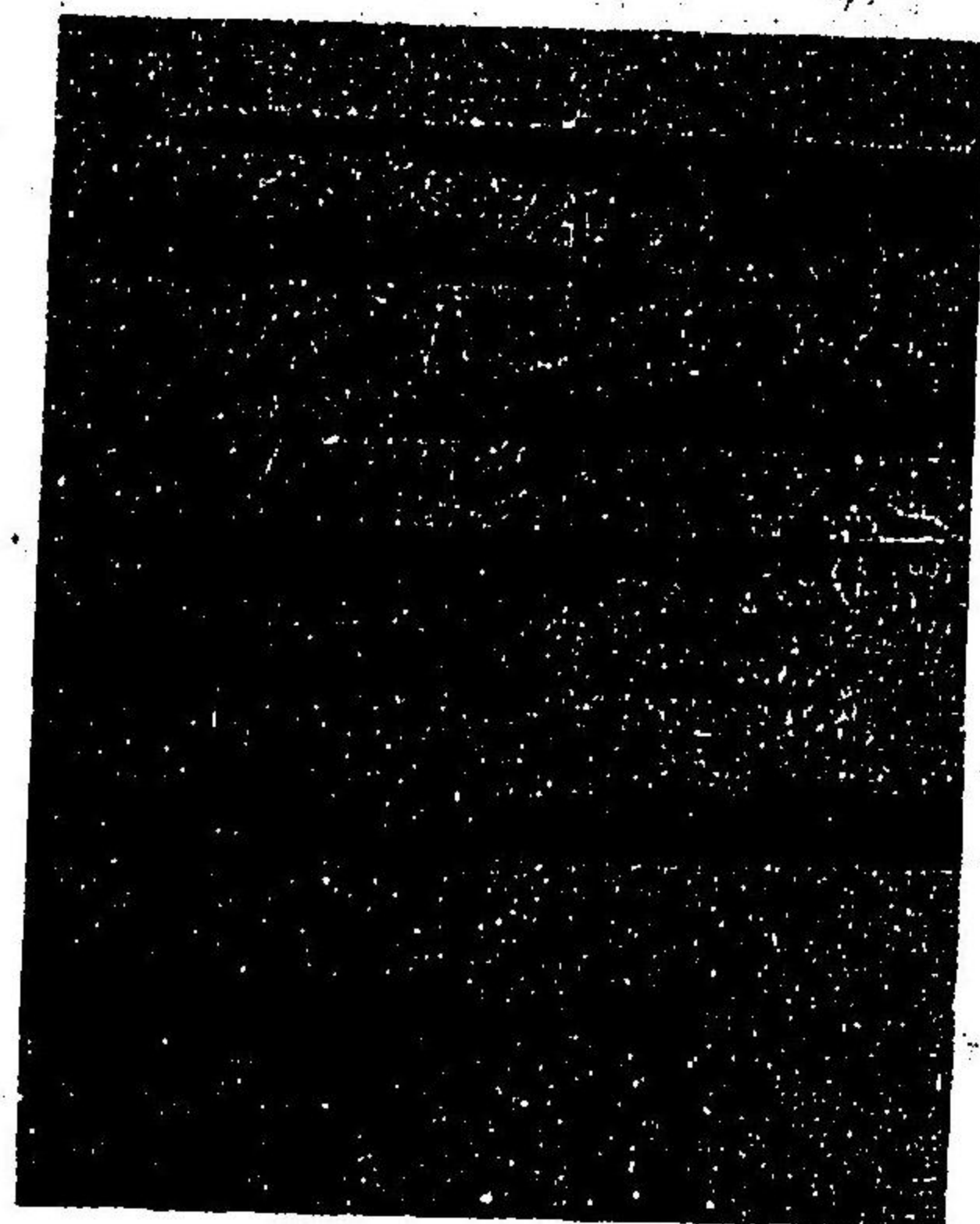
賓水文庫





111963





紙懷及像肖卿護齊川細





高



風



清韻



癸卯仲秋

孫茂成謹題





從五位上藤原兼昭

世にひろく名をたうりしを

志記しま純まきの法ありとも

あふりまあり



三位護美

ちれ實れちの  
と水くまの河と  
かよと歌みえけり



911.158 H718y I

### 細川齊護卿小傳

細川齊護卿は、舊熊本第十代の藩主にして、幽齋藤孝公の裔なり。父は細川和泉守立之、母は榮昌院夫人、即ち土井大炊頭源利厚の女なり。文化元年甲子九月十六日、江戸永田町の邸にて誕生、與松と稱せらる。文政元年戊寅八月九日、歳十五にして、父和泉守の遺領を相續し、同年己卯十月朔日、登城して、始て將軍家齊公に謁す。同年十二月十六日、從五位下に叙し、中務少輔に任じ、立政と稱せらる。同九年丙戌二月、宗家越中守齊樹卿病篤し、即ち使をこの卿の許に遣はし、繼嗣たらんことを乞ひ、幾



もなくして、身まかられぬ。仍りて、卿をば齊樹卿の養子と爲し、台命によりて、その封を襲がしめられたり。時に年二十三。實に三月廿九日なり。翌月登城、やがて越中守と改稱し、將軍の諱字を賜はりて、齊護と稱し、從四位下に叙し、侍從に任ぜらる。即ち家中に令を下して、祖先の舊規、就中、寶曆以來の制に基づき、諸事を處理し、文武を勵み、節儉を旨とすべき事を以てせられたり。同十年丁亥十一月十六日、淺野安藝守齊賢の女を迎へて室とせらる。顯光院夫人是れなり。

天保五年甲午十二月十六日、左近衛權少將に轉任、同九年戊戌、西丸炎上につき、金數萬兩を獻せられしかば、將

軍家慶、佩刀を賜ひ、又時服を賜へり。爾來、藩の治政宜しきを得たるを以て、時々、賜物及び賞詞あり。後、弘化元年、本丸炎上の時にも、獻金ありき。弘化二年乙巳、特に小石川目白臺松平駿河守(伊豫今治)の上地三千七百坪餘を賜はる。是れ今の細川侯爵の邸地の一部なり。

同六年、癸丑以來、米國使節船、相州浦賀に來り、屢々通商貿易を求む。幕府、その心情測り知るべからざるを以て、諸藩に令して、浦賀本牧邊一體の海岸を警備せしむ。時に、卿には同國大津に陣營を設け、一大隊の人をして、之を守らしめ、以て非常に備へられたり。爾來、屢々幕府の命に依りて、對外意見を呈せらる。安政三年丙辰十二月



十六日、左近衛權中將に轉任、同五年戊午七月、相州警備  
 勉勵の功を賞し、且は在府の藩士多數なるにより、幕府  
 より、濱町水野河内守(沼津)中邸の内六千坪を賜ふ。同年  
 十一月廿三日、從四位上に叙せらる。萬延元年庚申、是よ  
 り先、卿、隱退の志ありしも、幕府許さず。已むを得ず、子慶  
 順卿(後、詔邦と改む)を本藩に下して、國政を監せしめし  
 が、同年四月十七日、病を獲て、江戸龍口邸に卒せられぬ。  
 時に五十七歳。泰嚴院仁岳宗寬大居士と謚し、六月十九  
 日、品川妙解院に葬り、又遺髪を熊本妙解寺に葬りぬ。  
 卿、人と爲り、寛宏にして、溫和なり。常に靈感院を追慕し、  
 大小の事、一に之に倣はんことを務められたり。故に支

家より入りて、宗家を繼がれしにかゝはらず、藩中之を  
 仰ぐこと、父母のごとく、世に明君の稱を得らるゝに至  
 れり。卿は政治の暇には、常に讀書習字を怠らず、最も歌  
 を好まれ、而して、諸伎一も達せられざるはなかりき。是  
 れ皆天性の聰明と、輔導の宜しきとに因るといへども、  
 また御實母榮昌院夫人の訓育に原せずばあらず。(夫人  
 は稀なる賢女なりき。その行狀は、佐方信規著「谷の忍ぶ」  
 にくはし。)その逸事のごときは、卷末に附したる「齊護卿  
 遺事」を讀み下さば、大に悟る處あらん。

卿、六男五女あり。長は慶前卿、從四位下に叙し、兵部大輔  
 に任ず。壯年にて卒す。次詔邦卿、封を襲ぎて、越中守と稱



す。次護久卿、兄韶邦卿の養子と爲り、家督を相續して、同じく越中守と稱す。次承昭卿、出で、津輕氏を繼ぎ、今伯爵に列せらる。次友之丞君夭す。次護美卿、即ち今の長岡子爵なり。女は悉く成年に至らずして没せられた。三女勇姫、松平越前守慶永卿に嫁せられたり。

## 小引

細川齊護卿政治の暇に、歌を好ませられしが、その遺草、長岡子爵の藏せらるゝもの、凡そ十五冊あり。今その中に就て、七百十三首を撰み、これに詩百十四首、及び、道の記一篇を附して、「陽春集」と名づけ、こゝに出版することとしたり。

卿は當時の堂上諸家と交り深く、常に歌の批判をも乞はれ、贈答をもせられしかども、必しも、その風體に倣はず、傍ら民間復古體の歌をも加味斟酌せられしことは、家臣長瀬眞幸、中島廣足等を近づけさせられしにても



著しく、殊に廣足は、卿の内命を蒙り、都府に上りて、この學を修むるにさへ至りたり。かゝれば、卿の歌の姿、優に調高き一體を成して、おのづから、時流に擢てられしこと、偶然にあらざるを知るべし。

そもく、長瀬、中島等は、肥後復古體歌學の唱導者にして、今に至りて、餘韻絶えざるは、人の知る處なるが、畢竟、卿の奨勵に基きしものなり。されば、卿はたゞに熊本舊藩の英主として、その徳の仰がるゝのみならず、肥後歌學の開發誘導の主として、またその功を稱賛すべきなり。

卷首の卿の肖像は、細川侯爵家に藏せらるゝもの、その

懷紙は、長岡子爵家に傳はれるものなり。いづれも、由緒正しきものなれば、縮寫して、こゝに掲げつ。

卷末に附せし「庭の小柴」、「春のかり」の二篇は、長瀬眞幸が卿に従ひて、江戸に上下せし道の記なり。當時、大名道中のありさまの知らるゝのみならず、卿の歌をこのませられしことも、推しはからるれば、特に掲げしなり。

明治三十六年十月

編者識



目 錄

歌之部

春 ..... 一 頁

夏 ..... 二十三頁

秋 ..... 四十頁

冬 ..... 六十八頁

戀 ..... 八十一頁

雜 ..... 九十六頁

詩之部

詩 ..... 百十一頁



文之部

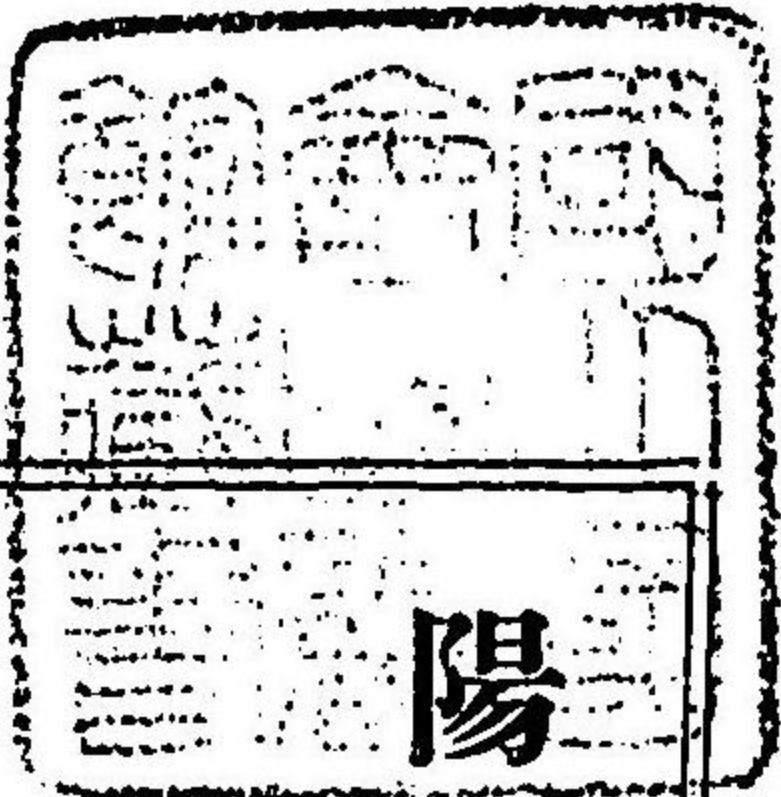
道の記 ..... 百三十三頁

附録

齊護卿遺事 ..... 一頁

にはの小柴 ..... 二十三頁

春のかり ..... 四十五頁



春集

歌之部

春

元旦

一夜明けてみな人ごに祝ふなるむつきはじめむつまじき哉  
あら玉の春のひかりを志きしまの道ある御代といはふもろびこ

初春祝君

新玉のはるをむかへてたれもみな君千代ませといはふことほぎ  
天が下をさまる御代のはるなれや四方のくにたみ君いはふらし

立春

日の本のあまねきひかり先づ見えておほうち山に春は來にけり



あめつちのひらけそめたる神代よりつきせすいはふ春やいく春  
都立春

小車のさきおふこゑものごかにてみやこおほちは春立ちにけり  
立春子日

もろ人のいはぶ子の日のひめ小松ひく手よりまづ春は立つらん  
初春見鶴

初春の千代をたづねてすみの江の松かけくれば田鶴のむれたる  
春色従東到

長閑なる御代のゑるしこ出る日のかすむかたより春や來ぬらむ  
都早春

山はなほ雪げながらにうちひさすみやは春こ先づかすむらん  
早春雪

七くさのなづなのわか葉ゆきつみて野へは春こも思はざりけり  
早春浦

ふじのねに春立ちくればみほの浦や雪のゑらなみまづ霞むなり  
子日

子日する野への小松を引きさうゑておほふばかりの影や待たまし  
残雪

来て見れば雪はけなくに三輪の山春のゑるしやいつこなるらむ  
ぬきうすき霞のころもはるさえてなほ見る雪は去年のまゝなり  
餘寒

春來ても板井のこほり解けやらで立ち離れうきうづみ火のもこ  
餘寒風

山ざこはさゆるあらしに春きてもはるこしもなき心ちこそすれ



餘寒氷

山ざこはたか根の雪にかぜさえていた井のみづぞまた氷りける

春氷

いつしかこ氷ふき解くはるかぜにながる、水もぬるみぬるかな

若菜

何事もあらたまる春にわきて名のふりせぬものは若菜なるらん

朝若菜

都びこそでのあさしもふりはへてあしたの原のわかな摘むなり

野若菜

うちむれて袖はぬるごもかすが野の雪まの若菜つみはやさまし

澤若菜

けふははや野澤の氷うちこけぬいざおもふごちわか菜つみてん

岡若菜

春あさきゆきまをわけて片岡のあしたのはらにわかなをぞ摘む

澤春草

はるはまだあさざは小野のあさなく下にいるそふ氷のふか芹

梅

ふるさこの春やむかしの梅が枝にかすめる月のかげぞかをれる

むかし誰が袖ふれそめしなごりこやかはらずにほふ難波津の梅

梅有喜色

きみが代の春に咲き出づる梅の花げによるこびの色はふるしも

讀むふみのみちある御代にさく梅は花もうれしきいろに出らん

よろづ代もきみがかざ、んうめなれば花も色そふも、しきの春

雪中梅



待ちえては春かごぞ思ふ年のうちの雪よりにほふ梅のはつはな

梅似雪

きのふまで木ずゑに降りしゑら雪のおもかげのこす梅のはつ花

行路梅

ゆきすりの袖にもふかく匂へるは誰がためにさく野への梅ども

岡梅

香をこめて風をしるべにごへかしたな梅さくころの岡のべのやご

里梅

うちかすむ春もゑられて名もゑるく梅津のさきに匂ふうめが香

故郷梅

梅のはなかをるのきばに立ちよればむかしながらの春風ぞ吹く

野宿梅

香をこめてあかぬ心に咲くうめの花にひこ夜の野へのかりぶし

田家梅花

すみすてし庵あらはの小山田もはるを知らせてにほふうめが香

社頭梅

春ごごにいろ香ふかめて神垣に咲くやこのはな千代もへぬべし

曉更梅

あり明のかすみのまよりそここなく夢のまくらに匂ふうめが香

梅風

吹くかぜのかをらぬ里もなかりけり梅咲きにほふ春のこのころ

梅薰枕

あかずして友ごちぎらん手まくらをこごゝひがほの梅の下かぜ

落梅



みそらより降りくる雪かごばかりにはらへば袖に梅が香ぞする

のどけしな花も霞める木ずゑよりうちどけて鳴くうぐひすの聲

初聞鶯

春きぬと先づうれしきは我宿に木づたひそむるうぐひすのこゑ

鶯鳴梅

うめが枝のいろかをおのが身にしめてこゑさへにほふその鶯

山家鶯

世のなかをのがれし山のすみかにも心こきめくうぐひすのこゑ

ひこりのみ住む身の友とあはばの戸にあさ夕なるうぐひすの聲

霞中鶯

野も山もふかきかすみにくぐひすの花を尋ねてこゝら鳴くらん

松間鶯

春くれば千代の初音をまづ告げて松の木のにうぐひすぞ鳴く

舊巢鶯

谷かげは春のこゝろもあら雪のふる巢ながらにうぐひすのなく

故郷鶯

すみすてしわがふるさは荒れぬれどむかしわすれぬ鶯のこゑ

契あれば春もいく春ふるさこに馴れしもあらくうぐひすの鳴く

櫻間鶯

うぐひすやおのが羽風をうらむらん散らすさくらの花の白ゆき

柳

はなよりもこくうち解けて春のいろの霞になびくあをやぎの糸

春の日のひかりにもれぬ青柳の御代のすがたになびくのどけさ



柳露

はるかぜの吹くかた見えてあをやぎの糸にみだるゝ露のきら玉

柳辨春

くり出すいこのゆたかに青やぎのはるいくかへり色ふかむらん

門柳

いく春もくりかへしつゝあをやぎの糸ひくかごを人のこふらむ

橋柳

あをやぎのみごりのいごを打ちはへて春風わたる宇治の川はし

河邊柳

淀川やふねのつなでにうちはへて浪にひかるゝきしをあをやぎ  
たつだ川きしのやなぎのうちなびき下枝にかゝる水のきらなみ

霞

ひこ夜あけて春のすがたこなるものは空にたなびく霞なりけり  
はるがすみたなびきにけり横向の檜ばらの山はいづこなるらん

山霞

いごはやも立てるかすみに山鳥のをへの春のいろぞ見えける  
めなれつる尾上の松もほのくゝ今朝はかすみに遠ざかりけり

瀧霞

山姫のおるやかすみのぬきをよわみ亂れておつるたきのきら糸

河霞

はるふかくなりにつらしな水無瀬川ゆくせも見えず霞たなびく  
はしひめの霞のころもひてしよりぬるみ行くらん宇治の川みづ

濱霞



さゝ波のよるこも見えず朝ぼらけかすみにもる志賀のはま松

浦霞

わたのはら八重の志ほちもわかぬまで霞みこめたる浦の夕なぎ

海路霞

難波かた汐干志ほみちわかぬまでここ浦かけてかすむはるかな

遠近歸雁

いくつらのゆくへは消えて白雲におくれてのこる雁のひここる

歸雁連雲

八重がすみかすみこめたる春の夜の雲路をかへるかりの一つら

歸雁幽

なごりあれや霞める空に聲はしてつばさ消えゆく春のかりがね

春曙雁

あはれなり花にわかれて行くかりの聲もかすめる春のあけぼの

夕歸雁

天つそら雲のはたてのゆふがすみ消えて越路にかへるかりがね

野堇

春の野につめごもあかぬすみれ艸色しあせずは明日も来て見ん

朝野堇

むさし野や誰がゆかりにて紫のいろなつかしく咲くすみれども

故郷堇

朝ぼらけ小野の志ばふのすみれぐさ摘むやゆかりの遠の里の子

櫻

そのかみの春をわすれでふるさこに今もすみれのはなぞ色こき

たくひなきほごも知られぬ日の本の春のひかりに匂ふさくら



花未發

さほひめのたれにちぎりをむすびけんまだ解けやらぬ花の下紐

曉花

月はまだそらにのこりてよし野山みねにわかるゝはなの横ぐも

夕花

ゆふぐれをあかぬ櫻にのこしては夜も見るべくおもほゆるかな

夜花

春の夜のみねはなれ行くつきかけにさはらでにほふ花のしら雲

山中花

よし野山ふるきゑをりの跡こめて花よりおくのはなやたづねん

江花

小鮎つるころにしなれば大井川いりえもはなのなみぞ立ちける

湖邊花

にほの海や松ふくかぜもにほふらん志賀の山越さくら咲くころ

關花

あふ坂の山路のさくら咲きにけり花にあらしのせきもりもがな  
春かぜの山ふき越えてさそふらん不破のせきちは花もこゝめず

雲間花

あら雲のいろもひごつに匂ふなりよし野のやまの花のあけぼの

花似雲

明けゆけばみねにわかるゝあら雲の残るや花のこずゑなるらん

花處々

いづこごもいかに定めていかに見ん花の盛りにあくがるゝ身は

交花



むらさきの袖をつらねて春いく日はなの木かげにあそぶみや人  
花にのみあくがるゝ身は小蝶にもいく日馴れぬこ人のこふらん

花錦

たつだ山あきのもみぢのいろのみか花のにしきもさらす春かな

静見花

今日もまた心しづかにながめつゝあくよも知らぬ花の木のもと

待隣家花

よそながら花を待ちつゝなか垣のそなたにかよふわがこゝろ哉

花薫風

吹きおくるかぜのたよりに匂はずは高根のさくら雲このみ見ん

松隔花

ちらぬまもこゝろぞさわぐ一むらの松をくまなる花のさかりは

花麻

をしまるゝ櫻もぬさこ散りくるはちぶりの神のはるの手むけか

社頭花

さかき葉にゑらゆふかけてさくら花ほのくゝにほふ野の宮の春

寄花神祇

仰げなほ神のいがきのさくら花干こせのはるや咲きつゝくらん

春風

はる風の吹こし吹けばそここなくかすみをもれて花の香ぞする

春日

春のうみやいごのどげき波路よりゆふ日かゝやくおきつ島山

湖上春曙

比良の山はなの香さそふかせ落ちてさゝ波にほふ春のあけぼの



志賀のうらやひごもごまつはほの見えてなみよりあくる春の曙

春雨

うめが香も袖もしめりてかすみつゝ降るごもわかぬ春雨のには

夜春雨

静なるこゝろにかなふ山ざこは降るもうれしき夜半のはるさめ

春月

山のはのかすみをいで、咲くはなの木ずゑにやごる春の夜の月

幽栖春月

あはれなり人もごひ來でいくはるをふるやの軒にかすむ月かけ

湊春月

海士をぶね楫音ばかりきこゆなり由良のみなこの月かすむ夜は

春里

この里の花にこゝろをまかせてはいかで野山のはるをおもはん

春山

佐保姫のかすみのころもたちこめて山もおくある花のちらくも

野遊

つばなぬぎすみれ摘みにご春いく日なれてや野へに通ふ里の子

おもふごち花をめでつゝ今日もまた霞む野山にあかで暮らしつ

春駒

難波江のみぎはのすゝきつのぐめば尾花葦毛のこまぞいばゆる

安達野につながぬ駒のはなれぬは今やますげのもえ出でにけん

牧春駒

はる駒のをのゝみまきにあそぶめりいつか都に引きて出づらむ

秋たゝば引きやわかれんち月のみまきにいさむ春のわかこま



呼子鳥

春がすみふかきみ山のおくにしていざまた誰をよぶ子ごりぞも  
ゆふぐれのかすみをふかみ來ぬひこや待ちかね山に呼子鳥なく  
野雉子

野雉子

すみれ咲く色もゆかりのむさし野に妻なつかしみ雉子鳴くらん  
武藏野に妻やこもらんわか草のかすみがくれにきゝすなくなり

簾外燕

春風につばさ吹かれてつばくらめをすのすき影ゆきかへる見ゆ

夕蛙

夕まぐれ山田のくろにあめ過ぎておのが時こやかはづ鳴くらむ  
いけ水のひしのうき葉にあめそゝぎゆふへはわきて蛙なくなり

苗代

せき入れてみづゆたかにも見ゆるかな秋をたのみのゑづが苗代

歎冬

惜しめどもごまらで春のくれ行くをいはぬおもひの山吹のはな

故郷歎冬

ふるさこに來て見る人のたもこよりいこゝつゆけき山ぶきの花

杜若

澤水にかげをふかめてたれ見よこひこり色あるかきつばたぞも  
やつはしに咲くや昔のかきつばたふるさこかけて忍ばれにけり

躑躅

入日さすきぬがさ岡のいはつゝじこれぞこぞめの色ここそ見れ

藤

なつかしなこきむらさきの藤のはな妹がころもの色こ見るまで



松上藤

常盤なる松の木ずゑのふちなみは千こせの春をかけて咲くらん

石清水臨時祭

をここ山いくはるごごにかざすらん花に馴れにし山あるのそで

稻荷詣

祈れなほこゝろのこまるいなりやま今日ねぎごごのみつの玉垣

暮春

散りそめん明日のうらみや初瀬山はなにつれなき入あひのかね

三月盡

けふのみこ思へばうたて花ごりにあかず馴れにし春のわかれ路

春祝

幾春のかはらぬ色をちぎりおきて松の木の間にうぐひすの鳴く

夏

樹陰夏來

花は根にかへるうらみの色かへてみごりすゝしく夏は來にけり

山家首夏

やまざごにははの苔路に咲きにほふ花をのこして夏はきにけり

昨日みしはなの木ずゑの名ごりなくみごりすゝしきなつ山の色

谷餘花

おそざくらさながら春のいろ見せて夏さしもなき谷かげのいほ

分け入りしかひもありけりたにふかみ青葉まじりのはなの一本

更衣

花ゆるゑにいこひし風もたちかへて今日より夏のそでに待たるゝ



蟬の羽のころもに夏はたちぬれど飽かぬころは花ぞめにして

新竹

君が代にならふすがたのすぐなるや御園になびく今年おひの竹  
ことし生の竹のわか葉のまげりあひて行末ちぎる陰そはるらん

垣卯花

雪と見えておのが青葉をうづむまで咲きものこらぬ垣の卯の花

卯花盛

月雪のいろをうつしてさかりなる卯の花がきはやみの夜もなし

行路卯花

うの花の雪にあさあるこちして一すぢほそき野へのかよひち

遠村卯花

夕月のほのめくかけと見ゆるかな卯のはな咲ける遠のひごむら

谷卯花

まばびこのこれや小川のなみと見てわたれどぬれぬ谷の卯の花  
埋木のこれもたくひとなりぬべし谷ふごころに咲ける卯のはな

葵

宮びこの今日のかざしのおふひぐさうれしと空に神も見るらん  
ゆく末をなほいのる身は神山のけふのおふひをかけてたのまむ

郭公

ほごぎすむかしかたらふ友なれや花たちばなに来つゝ鳴く聲  
あづさ弓いるのゝ山のほごぎすほのかに名のるゆふ月のそら  
五月雨の晴れゆく空にふりいでゝさだかになのる山ほごぎす

待郭公

ほのかにもいつかは聞かんほごぎす待つ夜かさねし有明の空



初郭公

折しもあれ月にほのめく雲間よりはつ音うれしき山ほこぎす  
ひごこゑのほのかなれども時鳥ものにまぎれぬはつねなりけり  
郭公一聲

ふた聲ときかぬつらさにあたへども雲にいるさの山ほこぎす  
時鳥ものにまぎれてひごこゑはさだかならねど聞きはこがめつ  
あかつきの空より洩らすひご聲は月を名こりのやまほこぎす  
曙郭公

有明の月はのこりてよこぐものわかるゝそらに鳴くほこぎす  
雨後郭公

むら雨のかぎりも見えし雲間よりほのかに名のる山ほこぎす  
雨晴るゝ雲路のすゑやまよふらん聲もほのかに鳴くほこぎす

連夜郭公

誰が里もねぬ夜のかずや重ぬらん山ほこぎすこゝら鳴くころ  
たちばなのにはふ軒ばのよなくに語らひ馴るゝ山ほこぎす

遠郭公

待ちえても雲井はるけきほこぎす鳴くひご聲を夢かごぞ思ふ

近郭公

まつ宵の月よりさきにほこぎす洩らす初音もさやけかりけり

浦郭公

よるなみのかへる方をやゑたふらん山ほこぎす浦づたひ鳴く

湖郭公

辛崎やさゝなみかけてほこぎすこゑは松にもこのらざりけり  
うら風も聲うちそへてにほの海やさゝなみ遠く鳴くほこぎす



里郭公

いと早も聞くぞうれしきほこぎすゑのぶの里のゑのびねの頃

市郭公

市人もあかずや聞かんほこぎす三輪の檜ばらに行かへり鳴く

杜郭公

鳴けや鳴け山ほこぎすいくたびか生田の杜のかげをこひきて

古宅郭公

夜や更けぬねやのあれまの空すぎて山ほこぎす今ぞ鳴くなる

端午興

のきはよりかをる菖蒲のあさつゆに袖もさつきの玉をかけつゝ  
幾千代もためしかはらずあやめ草五月のけふをいはふここの葉

菖蒲

ほこぎす鳴音をそへよさみだれのゑづくも匂ふ軒のあやめに  
浅からぬねざしをこめてあやめ草こよひまくらにひき結ぶなり

江菖蒲

風わたる入江のなみに舟かけて引く手もかをるあやめぐさかな  
おり立ちて引くや入江の菖蒲艸ふかき根ざしを世々のためしこ

橘

なつかしなふるき軒ばのくさならでむかしを今にかをるたち花  
この夕べはしゐの袖のほへるは花たちはなにかぜや過ぎけん  
はしゐする袖にむかしをゑのばせて匂ひまぢかき軒のたちばな

夕橘

むかしへにかはらず匂ふたち花のそでの香ゑめるのきの夕かぜ

棟



むらさきの色にあふちの花咲きてゆかりも知らぬ里訪ひてけり  
早苗

秋を待つ民のこゝろぞ知られける早苗さるくうたふこゑにも  
うゑわたす山田のさなへつゆ見えて秋の穂なみぞ思ひやらるゝ

雨中早苗

賤の女が袖もほしあへず五月雨のふるのあらたに早苗さるなり  
待ちえたる五月の雨にきほひつゝ田子の早苗にけふも暮れぬる  
ふる雨の晴れまも待たず袖ぬれて早苗をいそぐ田子のもろこゑ

五月雨

けふ幾日ひごもごひ來でつれぐに降る五月雨ぞ暮しわびぬる  
かきくらしふる五月雨のけふ幾日いろづく梅もえだになきまで  
ながめわびぬ軒の玉水いごまなみ日敷ふるやのさみだれのそら

浦五月雨

蜚のたくけぶりも絶えてさみだれにみるめさびしき鹽竈のうら  
なには江や浦わのあしも波こえてるほひもわかぬさみだれの頃

嶺五月雨

浅間山みねのけぶりもわかぬまで雲もいく重のさみだれのそら

水鶏

まきの戸をたゝく水鶏にはかられてうれしくむかふあり明の月  
五月雨の晴れせぬ宿のくらき夜になにをくひなの鳴き明すらん  
いかにまた誰が門なれば名にたてゝよひく毎にたゝく水鶏ぞ  
あかつきにたゝく水鶏は起きいでゝつかふる道に今いそげこや

曉鵜河

宇治川やくだす鵜舟のかゝり火のさす程もなくあらむみじか夜



うかひぶね下すまもなく大井川なみまにあらむなつの夜のそら

雨後鵜河

鵜飼舟むらさめ晴れてすむ星のかけにあらそふ瀬々のかかり火

水邊螢

橋姫のかざしの玉ご見るばかりほたるみだるゝ宇治のかはかせ  
つゆのみか生ひそふ池のはちすばにたまご見ゆるは螢なりけり  
池水におもひみだれて飛ぶほたるもえてもかげの涼しかりけり  
水の面にまだきすゝしき星合のかけご見ゆるはほたるなりけり

螢過窓

耻かしなまなぶかひなきわがまごは照らす螢もよそになしけり

螢透簾

をすの外の風にみだれて飛ぶほたる見えみ見えずみ影の涼しき

雨中螢

雨くらき軒のゑづくに飛ぶほたる消えぬやおのが思ひなるらん

橋邊螢

ゆく水のすゑも知られてゆふやみにほたる飛びかふ野路の板橋  
くるゝより照りこそわたれ水の面に螢ながるゝまゝのつぎはし

海上螢

伊勢の海やきよきなぎさに飛ぶ螢あまもひろはぬ玉ごこそ見れ

雨後蟬

夕だちの晴れゆくまゝに鳴くせみの杜の木がくれ聲きほふなり

連夜照射

夏山のしげみを分けてよる鹿をいく夜待つごかごもしさすらん  
五月やみ晴れぬ思ひにますらをがゑめりがちなる照射さすらし



蚊遣火

夕まぐれ吹くかぜ見えて蚊やり火のけぶりたなびく遠の山ざこ  
かすかにてそこも知らぬ山かげも人住みけりさ見ゆる蚊遣火  
隣蚊遣火

われもさは今たきそへてへだてなき心あらせん夜半のかやりび  
夏月

涼しさを袖に待ちこるほごもなくはや白らみ行くなつの夜の月  
夏月涼

すゞしきは木々のこずゑに風こえて來ぬ秋さそふ夏のよのつき  
更けぬるか秋かぜ待たぬすゞしきは月をやごせるやまの井の水  
夏月易明

ほごゝぎす待つとせしまに明けにけりその山のはの夏の夜の月

樹陰夏月

夏さればつゆのひかりも玉がしは葉わけすゞしくみがく月かな  
夏星

はしゐして月待つころの空にまづすゞしく見ゆる夕づゝのかけ  
水邊納涼

水そこの月に吹く夜のかはかぜは身にあむばかり涼しかりけり  
すゞみこるつきに吹くよのかは風は秋も今來んこゝちこそすれ  
夕立

時のまにかゝるさ見れば行きすぎて入日すゞしき夕だちのそら  
けふもまた富士のたかねに雲見えてゆふだちすなり浮島がはら  
此里は照る日ながらに鳴るかみの山めぐりするゆふだちのそら

暑避



立ちよりて岩もる清水むすぶ手にあたる汗もをさまりにけり

夏夕

こごし生の竹のわか葉のしげりあひて吹く音すゞし夏の夕かぜ

夏眺望

河ぞひにうゑし田面を立つさぎのゆくへも見ゆる夏のゆふぐれ

夏雨

雨たゞくならのひろ葉の木ゑたはさながら露の玉しきてけり

夏夜雨

かぜを待つはしゐの袖のすゞしさは月にさはらぬむら雨のそら

夏風

夏ながら萩のうは葉を吹くかぜはまだきに秋のけしきなりけり

夏草

夏ふかくなり行くまゝにあげりあひて草の葉山を庭に見るかな  
野へ見ればすみれつばなのわかぬまでひこつみごりに茂る夏艸

夏草露

わけ行けば袖にみだれて秋このみつゆを花なる野へのなつくさ

瞿麥

朝なく露おきそひて二葉よりわがなでしこのはな咲きにけり  
たらちねの庭のをしへの色ふかきめぐみの露のなでしこのはな

夕顔

賤がやのかきねづたひに咲きそめてたそがれ白しつゆの夕がほ

蓮

ゑら露は玉ごみだれてゆふかぜにかをるもすゞし池のはちすば  
われもまたこゝろ濁さでめでなましつひのやごりきたのむ蓮葉



夏泉

むすぶ手にまばしは夏をわすれ井の水のあたりぞ立はなれうき  
湧きいづる松がね煮みづ立ちよれば夏よそげなる風ぞすゞしき

夏川

かゞり火のみづにうつれば大井川瀬による鮎のかずも見えけり

夏山

夏されば花のなごりのいろもなく山はみごりのころもかへせり

晚風有秋

このゆふべはしるの袖のすゞしきに秋とおごろく風のおこづれ

晚夏

ゆふべくたつる蚊遣のすゑつひになびきやはてん秋ぎりの空  
夏もはやひこ夜ふた夜にくれ竹のそよぐかたよりかよふ秋かぜ

六月稜

もろ人のたもごすゞしくみそぎする神なびがはに夏もいぬめり

夏祝

今年生のわか葉の竹のいく千代もさか行くかげは君に見るべき



秋

早秋

吹くかぜのおはこの山におこたて、關のあなたも秋や知るらん

早涼

手に馴れし扇もけさはわすられてそでにおぼゆる秋のはつかぜ

立秋

小はぎ原秋は來にけりきりくす今いく日ありて聲やたつらん

萩知秋

けさよりは身にしむ秋のはつ風を萩のうは葉やまづ知らすらむ

月前萩

露ふかきにはの萩はらかぜふれてうは葉の月のかげぞこぼる、

江亭萩

さびしごもさびしきものかわが宿は入江の萩にあきかぜぞ吹く

古砌萩

誰がうゑし秋をしのびてふるさこのみぎりの萩の穂には出らん

月前萩

あき萩の花ずりごろもきて見よごすめるか野路の月のさやけさ  
咲きしより露もいろなる小はぎ原うつろふ月のあきの夜な

行路萩

やつれたる袖にも摺らん旅びこのゆき、のをかのあき萩のはな

河邊萩

水のいろもむらさきふかく見えにけり小萩うつろふ野路の玉川

萩露



ゆふさればおきあまる露も糸萩につらぬきかけて玉ぞみだるゝ  
七夕薫

この夕ほしに手むけのそらだきを雲井にさそへあまのかはかせ  
家々七夕

誰もみなこゝろぐゝの手むけして宿てふやごもほしまつるなり  
野外七夕

さまざまの虫の音そへていざけふは嵯峨野の野守星まつりせよ  
七夕虫

ひこ星の駒にまかせて来るよひこ鳴く音をそふるくつわ虫かな  
七夕鳥

神代よりいくあきかけてたなばたの契り馴れたるかさゝぎの橋  
七夕猪

ひこゝせにひこ夜ばかりは二星のならびふすゐのここや露けき

七夕草

塵をだにすゑじご待ちしたなばたのこけてぬる夜の床夏のはな

七夕川

くれにけり早や舟わたせわたしもり天のかはかせ波たゝぬまに

七夕瀬

安川のやすらにわたせ彦ぼしのこよひあふ瀬のつまむかへぶね

七夕布

おりひめのころもにせよこ細ぬのをけふの里人けふやおるらん

七夕衣

織ひめの天つひれふるさよごろも秋をまつらのうらならねごも

七夕車



たなばたの飽かぬわかれのかよひ路にやる方まよふ今朝の小車  
七夕書

日のもごにをさまるみちの四つの書五つの巻もほしに手むけて  
七夕後朝

天のがは今朝のうき瀬にそでぬれてかへさの舟は棹やたゆまん  
禁中七夕

これぞこの絶えぬちぎりよ雲のうへに君と星とのよろづ代の秋  
七夕祝

ちぎりおく秋もいくあき君が経んためしはつきぬ天つほしあひ  
曉更月

降りそめし霜かごばかりありあけの月かけろしあさぢふの庭  
かねの音もすみこそ渡れながき夜の月おちかゝる峰のかけはし

有明月

かへるさの野へのみちしば露見えてたがきぬぐの有明のつき

暮天月

山のはにゆふあるくもを松かぜのはらふにつれて月ぞほのめく

三日月

足びきの山のをのへのうきぐものたえまにさむき三日月のかけ

十五夜月

そらにみつひかりはたれもあふぐらん秋津しまねの望の夜の月

廿日月

宵のまの雲はあらしに消えはてゝ山のはつかに出づるつきかけ

上弦月

いかなれば山のあなたに引かるらん立ちものぼらぬ弓張のつき



下弦月

引き留めてたがきぬぐに恨むらんあかつき近きゆみはりの月  
雨後月

むら雨のなごりの露にみが、れてひかり澄みゆく淺茅生のつき  
松間月

木のまよりもり来る月もかみさびていく世の秋のすみよしの松  
岡竹月

ふるさこの名さへなつかしくれたけのよも長岡のあきの月かけ  
田家見月

賤よいかに山田のいほの稻むしろ志きしのびても月や見るらん  
井月

たをやめがうつす姿のいにしへを月にぞ志のぶまゝの井のみづ

池月

芦の葉は枯れふすばかり秋更けてつきかげさびしこやのいけ水

沼月

みちのくの淺香のぬまのあさからぬ玉ものかずも月に見るべく

江月

あき風の吹くかた見えてあしの葉のかけもみだるゝ三島江の月

河月

神代よりあふぐもひさし五十鈴川にこらですめる月のひかりを

浦月

月もこよひ松もひこ木の名にめでゝかげもてあそぶ志賀の浦人

湊月

たがなみだ宿り馴れてやほしあへぬ袖のみなこの秋の夜のつき



泊月

播磨がたむろのごまりに船こめてごまもる月のかげを見るかな

野月

わけ來れば眞萩も月のしたつゆにぬれている添ふ宮城野のはら

岡月

秋こよひたれもめづらんみづぐきの岡のやかたにすめる月かけ

村月

ふえの音に野がひの牛のかへるさも月に見えゆく里のひこむら

山月

山かぜにたかねの雲をはらはせてかげ澄みのぼるあきの夜の月

山家月

志ば栗をあさるましらのかくろひも月に見えゆく秋のやまざこ

世をのがれ身をやすくおく山のいはは月も心になふしづけさ

嶺月

つくばねの峯のまつかせ霧晴れてはやまあげやま澄める月かけ

苔徑月

苔のむす山路の月にゆくひこはみごりのそらを踏むこゝちせん

橋上月

月に吹くかはかせいかに秋更けて身はさむしろの宇治の橋ひめ

花洛月

をさまれる御代のあるしとうちひさす都や月のすみまさるらん

古寺月

峯たかみ松よりおくのふるてらは世のほかにかそ月もすむらめ  
かねの音もさやかにひくふる寺の法にすみそふやまのはの月



古寺殘月

有明の月はのこりてひゞき來るかねよりあらむ小はつ瀬のやま  
名所月

うら風にうきぐも晴れて清見がたなみちさやかに澄める月かけ  
明石がたゑまやまごほく霧はれて更け行くなみにすめるつき影  
月下鶏

ありあけの月にたがはぬ鳥のねや誰がきぬぐの夢くだくらん  
月前遠島

たぐひなき繪島が秋の月かけをうつしごゝめて見るよしもがな  
禁中月

更けにけりごのゐの沓のおご澄みて月かけあろし玉あきには  
獨見月

人ごはぬくさのいほりの秋の夜はこゝろよりすむ月をこそ見れ  
月前遠情

松浦がた千さごの浪のすゑかけて見ぬもろこしも月はすむらん  
濱月似雪

かくてまた今よひ名におふあら濱のしらすの月や雪をまくらむ  
月前聞鐘

更けぬるか尾上のかねのおご冴えて霜かさばかりすめる月かけ  
秋月入簾

秋ふけてしぐるゝ夜はの玉すだれもる月かけも見えみ見えずみ  
樵夫歸月

たれ見よごおのがたきゝのもみち葉に月をのせつゝ歸る柚びこ  
寄月友



あさちふのにはしづかなるあきのよは月よりほかの友も求めず

秋風

いつも聞く風は知れど桐の葉のまづ散る今朝の秋ぞ身にしむ

海邊秋風

浦びこのくむやもしほのころも手も身にしめこてか秋風の吹く

葛風

秋風になびく干ぐさもあるものを葛の葉のみやなにうらむらん

月前風

まぐるゝこ立ちいでゝ見れば雲もなく月にすみゆく松風のこゑ

時雨

きのふけふ一むらかゝるうきぐもに外山の秋ぞまだきしぐるゝ

月前時雨

中ぞらは晴れみくもりみうき雲のしぐれてさむき月のかげかな

秋雨

ゆふされば軒のしづくのおこそへて袖やすからぬ秋のむらさめ

野露

八千ぐさの花のいろくおきかへて野へおもしろき露を見る哉

月前露

あはれなりむぐらがまたも露といふ露には月のかげをやごして

秋さむみつゆの玉まくまくずはらうらむなごてや月やごるらん

草花早

穂にいでゝまだ袖せばき花ずゝきこくまねけこや秋かぜの吹く

たなばたの手向に咲くか露いまだ知らずがほなるあき萩のはな

庭草花



宿ながら野へのけしきを見よこてや一本すゝき穂に出でにけん  
月前草花

あき風に干ぐさの露のみだるればいろなる月のかげぞこぼるゝ  
露にみだれ風になびきて秋の野の月にはえあるはなのいろく  
草花交色

をこめ子がすがたの野へこ今ぞ見る秋の干ぐさの花のたもこは  
秋花不一

秋の野の干ぐさはいろをあらそへご月はわきても宿らざりけり  
薄

あき風にまねくものゆゑあづさ弓やたのゝすゝき人のこふらん  
行路薄

朝まだき分けこそわぶれ花ずゝきゆく手のそでに露もみだれて

月前薄

穂にいでゝ尾花なみよる野へ見れば秋かぜあろし月をやごして

荇萱

夜やさむき霜やおくらん秋更けて下をれおほき野へのかるかや

荇萱亂風

かぜのこがこ吹くをかごこに思ふかな亂れにけりなかが下折

女郎花

をみなハし露のよすがに下折れてあだなる色をたれに見すらん

蘭

秋の野にほころびそむるふちばかま草のたもこも香に匂ふらむ

槿

おき出でゝまづ見るものは宿ちかき露のまがきの朝がほのはな



誰ごてもたのむべしやはあさがほの花のひこ時それよ世のなか  
蓼

かひなしや河原におふる犬蓼の引くひこなしにしげるころかな  
朝霧

明くる夜のそれごは見えてかち人のまだ霧ふかき志のゝめの道  
月かげも明けゆく空の雲はれてなほ夜をのこすみねのあさぎり

夕霧

このゆふべ秋ぎり深く立ちこめてあじろ木いつこ宇治の川つら  
山もこの木ずゑもそれごわかぬまでいや立ちこめし秋の夕ぎり

田家霧

あづが住むやまもご遠く立ちこめてほむけも見えぬ小田の朝霧  
初雁

まちくゝて聞くぞうれしき初かりは戀しき人のふみならねごも  
白雲をつばさに幾重かさねつゝ今朝きにけらしころもかりがね

野雁

むさし野や尾ばなが袖の秋かぜにみだれておつる雁のひこつら  
山初雁

折しもあれをのへの月のあきかぜに聞くも珍らし初かりのこゑ

曉初雁

さぬぐの袖のなみだやさそふらんあかつき深きはつかりの聲  
風前雁

幾さをかけてやかよふ秋かぜのたよりにかりの聲きこゆなり  
めづらしごたれも聞くらん秋風のたよりうれしきかりの玉づさ

月前雁



秋の夜のくまなき月にかず見えてあまの戸わたる雁のいくつら  
雨中雁

夕ぐれのあはれもふかき秋の雨につばさ志をれて渡るかりがね  
鹿

さびしさをおのが時とや秋やまのしぐるゝころに鹿の鳴くらん  
あらし山夜はのあらしのさそひ来て嵯峨野にかよふさを鹿の聲  
立田山まぐるゝころはさをしかも紅葉のいろにふり出でゝ鳴く  
野鹿

あきの色をこゝにつくせと眞萩ちり尾花ふす野に鹿の鳴くらん  
秋の野の千ぐさのつゆに立ちぬれて妻やこふらん小男鹿のこゑ  
山鹿  
すむ人のこゝろやいかにまさき散るみやまの庵のさをしかの聲

外山鹿

うき秋のあはれも知れと鹿や鳴くまきのこやまの夕ぐれのそら

朝鹿

木曾山やをのへを見れば霧こめて鹿の音さむし朝あらしのかぜ

海邊鹿

船こめてたれか聞くらん淡路島きりのなかなるさをしかのこゑ

駒迎

まつよひもやゝ更けすぎぬいざとねり雲井にいそげ望月のこま

江邊鶉

眞野の江のをばながもこに床しめてうづらしばなく秋の夕ぐれ

故郷鶉

ふるさとの鶉のこゝは荒れはてゝ秋かぜのみや吹きかよふらん



田鳴

小夜ふけて門田守男のいねがてにあはれこや聞く志ぎの羽がき

浦鶴

和歌の浦や清きなぎさの月かげに田鶴もねられぬ聲きこゆなり

秋蝶

まはぎ咲くにはのまがきに宿かりて秋のこてふの露にむつるゝ

秋虫

淺茅生や秋のあはれも知られけり更けてぞしげき虫のこゑく

ふきまよふ風にみだれて鳴くむしは露の夜床やさだめかぬらん

露やさむき思ひやしげき秋やうきくさ根の虫の鳴きわぶるかな

故郷虫

くさ深みさらでも露のふるさに秋やむかしこ志のぶむしの音

旅虫

つゆふかき草のまくらはひこ夜だに夢をゆるさぬむしの聲かな

暮秋虫

淺ちふや夜さむのしみに秋くれてうら枯れわたる虫のこゑく

松虫

たづね來る人やおのが名にたてゝ鳴く音もゆかし野への松虫

聞けばなほ秋のあはれぞこもりける淺ちがおくの松むしのこゑ

鈴虫

振りすてゝいかに歸らん狩りくれて月になる野のすゝむしの聲

はし鷹の尾ぶさにつくる音ならでかへりゆく野に鈴むしの鳴く

秋の夜の月のかつらの花やかにふり出でゝ鳴くすゝむしのこゑ

蜚



あき風の夜さむわびてやきりぐす壁の下にもごひよりて鳴く  
ねやちかく枕ごひよるきりぐす秋のおもひや鳴きつくすらん

秋田

守る人よさぞな袖をもぬらすらんいな葉つゆ散る秋のゆふかぜ

秋山

都びご來ても見よかしく志ぐれ染めしもみちの秋のやまく

秋夕

うき身には物おもふ事のいつごしもわかぬながらに秋の夕ぐれ

遠村秋夕

ながめするそでもつゆけしをちかたや里ひごむらのあきの夕暮

薦

ましらなく聲さへさびし宇都のやま暮れゆく秋の薦の志たみち

朝紅葉

唐にしきいつ織りそめてたつだひめ寐ての朝げの山を染むらん

杜紅葉

秋來ればごきはの杜も名をかへてしぐるまに紅葉してけり

谷紅葉

たにの戸も天の川原の名やからんもみちの橋をかけわたしけり

風前紅葉

山風にさそはれて散るもみち葉はふもこの里にしぐれごぞ降る

紅葉如錦

むらしぐれ染むるもみちは少女子が袖ふる山にさらすにしきか

旅泊紅葉

紅葉あるいそ山もごにうきねしてごごまりご秋もごめまし



菊

うつし植ゑて露さへ色をかさねつゝ八重咲きにほふあら菊の花

谷菊

仙人のすみかもそこ汲みて知る老せぬきくのたにがはのみつ

濱菊

八百日ゆく濱のまさこのおなじ色に干こせもにほふ白菊のはな

名所菊

よる波もにほひをそへて打出のはまのあらぎくはなや咲くらん

挿頭菊

秋ここにやま路のたねをうつし植ゑてこや長月にかざすあら菊

愛菊

月の名のながきためしに一日をも干こせこなして菊をめてばや

重陽宴

こゝのへの秋もいく秋いくめぐり盡きぬためしや菊のさかづき  
君がよはひふりせぬ花にちぎりおきて千代もめぐらせきくの盃

搦衣

うちしきる四方のきぬたに誰が里も夜さむはおなじ心なるらん  
秋かぜをおのが夜寒になしはて、誰がためにうつ妹がさころも  
おほかたの秋のあはれもふか草の里の名しるく打つころもかな  
賤の女がきぬたのおこに誰が里のいかなる夢をおごろかすらん

搦衣何方

あき風のためめばたゆむ小夜衣うつこは聞けごそこさだめぬ

搦衣幽

衣うつまづがあはれを秋かぜのほのかにおくる夜半の手まくら



月前擣衣

更科のさこのきぬたやたゆむらんおばすてやまの月を見ながら  
あき風の夜さむのきぬた巻きかへし槇のしまびと月に打つなり  
賤の女が月をめで、やあきはぎの花ずりころも打ちもたゆまぬ  
たがさこも今や夜さむをいそぐらんかたぶく月にころも打つ聲

秋旅

旅ころも花の千ぐさにいろ染みて暮るれば月をかたしきのそで

秋社頭

あこ垂れし神代おぼえてあふぎ見るかげも名におふ月よみの杜  
朝熊やかゝみのみやのあきの月こゝにいく夜のかげみがくらん

暮秋

わがこゝろ染めし紅葉はかつ散りてあきのかぎりこ嵐吹くなり

九月盡

鳴く鹿もあはれをそへて惜むらん今日をかぎりの秋のわかれち

秋祝

大空をあふげばさらにあきらけき御代こや月も澄みまさるらん



冬

初冬

木の葉ちるけしきの杜の朝あらしはげしく吹きて冬は來にけり

落葉

なれて來る鳥のあごだにこのころは落葉に見えぬふるさこの庭  
吹くかぜを待たてやもろきは、そ原そめも盡さぬ色こ見しまに

月前落葉

峯おろすあらしのすゑのもみち葉にくもるこ見ゆる冬の夜の月

落葉殘秋

をしまれし秋もながれて大井川もみちいざよふなみの志がらみ  
霜

かさゝぎの橋ならなくにおく霜の白きを見れば沍えわたりけり  
人こはぬさゝの志のやの風さえて霜のふる夜はいぞねかねつる

閑庭霜

秋過ぎて人もこひ來ぬにはなれご霜のはなのみさかりなりけり

澤霜

あさなく野澤の水はこほりゐてあしのかれ葉に霜ぞまじろき

氷

今朝はまた池のさゝなみおごぞなき汀をかけてこほりゐにけん

氷始結

ここあれて鴛鴦もこゝろやくだくらん氷りそめけりこやの池水

初冬雲

神無月やがてあぐれやさそふらんふゆ立つそらに雲ぞたゞよふ



時雨

初霜のおきまさるべきほご見えて間なく時なくまぐれ降るなり  
ふもごにはしぐれぬ里もなかるらし山のは寒くかゝるむらくも  
吹きおろす外山のかぜに時雨きて見えずなり行くまがらきの里  
夜時雨

川時雨

たが里をめぐりくゝて村しぐれまたうたゝねのまくら訪ふらん  
大井川はやせの波にしぐれ来て笠もごりあへずくだすいかだし  
霰

篠霰

ゆふづく日さすかご見れば柴の戸にあられたばしり山風ぞ吹く  
昨日までむすびし露の...おきかへてあられ玉ちる野ちのしのはら

原霰

狩人のそでさむからしあられ降るたまのゝはらの玉ごみだれて  
野霰

霰残夢

あらち山やま風あらくまき来て矢田野の淺茅あられたばしる  
降りきほ音もあられのいく度か見はてぬねやの夢くだくらん  
霰

初雪

ふき立つる軒の木がらし音たてゝ朽葉がうへにみぞれ降り來ぬ  
消えあへぬ霜かごばかりふりそめてまだ淺ちふの今朝のしら雪  
嶺初雪

うちむかふよそめは雲ごまがはせて初雪しろきあけぼのゝみね



曉雪

おもかげに花さへそひてありあけの月と雪をみよし野のやま

薄暮雪

聞きなれし松のあらしも音たえてゆふぐれふかくつもる白ゆき

田雪

さこの子がゆきも今朝はいかならん雪に田づらの中道もなし

河邊雪

うづむべきひまこそなけれ水ぐるま雪をめぐらす淀のかはぎし  
大井川瀬々のしらなみおと冼えてうかべる雪やいかだなるらん

遠山雪

よるの雲晴れてはるかに見わたせば朝日にみがく雪のこほやま

狩場雪

くれかけて降りくる雪にはしたかをいまひごよりこあはす狩人

旅雪

乗る駒も行きなやむまで降るゆきにいかで箱根の關は越えまし  
すゝか山關のむまやち雪ふかみ越えやわぶらん今朝のたびとこ

雪似花

降りかゝるこずゑの雪も春を待つこゝろづからや花と見ゆらん

雪埋松

あろ妙の色にみぎりもうづもれてすがたばかりの雪のまつがえ

雪中竹

このあさげみぎりのいろに埋もれて雪をすがたになびくなよ竹

寒月

此頃はさほるひと葉のくまもなくかげ冼えまさる冬の夜のつき



志も冴えてあらしにむせぶ松がえにひごり静けき月のかげかな  
浅ちふや吹くかぜさむく小夜ふけて霜よりさきにこほる月かけ  
ふゆの夜はみる人なくてたが里もおこなく更くる月のさびしさ

寒草

秋の野のかたみばかりに刈り残す一むらすきあはれこそ見る

寒蘆

この頃は枯れふす蘆にかぜの音のそよぎ馴れしも聞えざりけり

江寒蘆

難波江のいりえのあしも霜がれて棚なしをぶねさはらざりけり  
ひこむらや残るも蘆のうら枯れていこゝみるめのさむき難波江

枯野

野邊みれば干ぐさばかりかさを鹿の鳴くねをさへに霜枯にけり

秋の色もうつろふ野へのすゑつひに尾花がそでも霜がれにけり

寒庭

このころはあだなる草のごさしかな人め絶えたる冬がれには

椎柴

朝戸出のしろきを見れば霜いく重おきかさねたる峯のしひしば  
音たてゝこずゑをさそふしくれにも葉かへぬいろやみねの椎柴

薪

あられ降りいたきあらしの今日こいへご眞柴こるらん大原の里

水鳥近馴

宇治川やいざよふ波のよるくはあじろにちかく馴るゝ水こり  
ちぎりあれば立ちもさわがで朝なく手飼に似たる池のをし鴨

曉千鳥



たなかみのあじろの篝かげ消えてあかつきくらく鳴く千鳥かな  
さえわたる波まの月のかげおちて有明のそらに千どりなくなり

夕千鳥

夕しほの満ちくるいそや寒からし月にみだれてちどり鳴くなり

月前千鳥

さえまさる月にむれ立つかず見えて聲もさむけく千鳥なくなり

岸千鳥

よる波におもひくだけておのれのみ鳴くや千鳥の岸のいはがね

遠近千鳥

淡路しまかよふ友にはおくれゐて音になく須磨のうらちどり哉

鴛鴦

江をさむみ夜はすがらに鴛鴦ぞなく上毛まだらに霜やおくらん

蘆間鴛鴦

みしま江の玉えのあしの霜かれて床わびしげにをしぞ鳴くなる

江上鴛鴦

色もなき霜のふる江の水の上にあやなすものは鴛鴦の毛ころも

鷹狩

けふも又しらふの鷹を手にするて雪うちはらふ野へのをちこち

狩場欲暮

鷹するて鳥立のはらを日のかげのかたぶくかぎり狩り暮しつる

炭竈

ゆきさそふ風になびきて炭がまのけぶりもくもる小野の山ざこ

爐火

消えのころ閨のうづみ火さよ更けて空しく年のくれんこすなり



閑居爐火

いくたびか炭さし添へて埋火をこもこし馴る、ふゆの夜半かな

爐火似春

蝶にこそなるべかりけれうづみ火のあたりは春を思ひねのゆめ  
さえまさる嵐はねやのよそにして春おもほゆるうづみ火のもこ

月照網代

千鳥なくかはせの月のさゆる夜にもるやあじろの床のさむしろ

湖水

きそ山の檜原のあらし吹く時や諏訪のうみづらこほりこづらん

樋水

やまざこは竹のかけひのこほりゐて心ぼそくもおこ絶えにけり

野行幸

降るゆきに鳥立もこめて今日君がみかりにあはすやかた尾の鷹

五節

をこめ子がをみのころもで月さえて雲井のにはに遊ぶもろびこ

神樂

まごゐする八十氏人のもの、音をおもしろしこや神も聞くらん  
笛竹の音もすみにけりよろづこせ千こせをうたふしめのうち人

月前神樂

をりかへし榊葉うたふこゑのうちに神代のまゝの月更けにけり

年内早梅

菊の、ち花なきふゆをなくさめてこしのこなたに梅かをるなり

舊年立春

ゆきに咲く梅のにはひやさそひけん年のうちより春立ちにけり



惜年

花の春もみちの秋のわかれよりけにをしまるゝこしのくれかな

家々歳暮

行くこしを惜むものから宿ごこに今來ん春を待たずしもあらず

歳暮祝

ゆたかなる民のみつぎの年のくれにぎはひ見えて春を待つらし

雪中除夜

今日のみこ月日のかずもいつのまに積もりて深きこしの白ゆき

冬祝

木ずゑにはゆきをいたゞくいろ見せて千代もふりせぬ高砂の松

戀

初戀

戀ごろもはつ花ぞめのさばかりもなみだの色にいでずしもがな

忍戀

そでのうへに落つるなみだを人こはゞ秋の習ひの露ごこたへん

思不言戀

年経ても人は知らじなここの葉にいひつくすへき思ひならねば

洩始戀

わが戀はくもまの月のかげなれや洩すにつけておもひこそすれ

互忍戀

洩さじこ忍ぶなみだをくらぶればおなじこゝろにぬらす袖かな



見戀

ほのかにも見るぞこひしきおもかげをしたふ雲間の三日月の影

且見戀

人ごころ浅香のぬまのあさくともかつ見るたびに戀やまさらん

時々見戀

雲間よりをりく見ゆる月かげにこころそらなる戀もするかな

契戀

わが戀は野中の清水こし経てもちぎりしまよにかれせじ

來不留戀

通ひ來るよひの雲間のいなづまのかげもこめず袖のうへの露  
わくらはにくるすのをの葛の葉のかへる恨みを風にかこたん

待戀

かならずこ契りおきしもうはの空に更けゆく月ぞ袖にやざれる  
待てこいひしその言の葉を偽のためしある世こかこたずもがな

初逢戀

にひ枕かはすこよひの後もなほあだになすなごちぎるここの葉

不逢戀

つれもなき中にかきやる玉章のむすびめ解けてあふよしもがな  
袖ぬれてあふここのなみのかたし貝あはで二見のうらみわびぬる

來不會戀

たが方に吹くあきかぜぞまくず原かへるうらみに袖ぬらせこや

夢逢戀

覺めて知るけさの心ぞうらめしきあふこ見つるも夢にこそあれ  
うちこけぬ人にも夜は逢ふこ見る夢のちぎりぞあやしかりける



寐覺戀

つれもなき人のこゝろの小夜しぐれ寐覺わびしくぬるゝ袖かな

後朝戀

別れこし袖のなごりのつゆなれや思ひみだるゝ今朝のみちしば

隔一夜戀

こひ慕ふけさの名残のうつり香に明日の夜ごろの待たれぬる哉

名立戀

いかなればあだなる名のみ立田川わたらでかゝる波のぬれぎぬ

隱在所戀

音にたてぬ露のちぎりもあるものを身は空蟬の木がくれぬこや

久戀

世にたゝんあだ名をゝしの思ひにてこもに浮寐の年ぞ經にける

片戀

いつかまた人に知られんこごもやこ心づよくもなほ戀ひにけり

難忘戀

汲みそめしもこの心はわすれ井の忘れかねたるみづからぞうき

被知戀

はかなくもおもひあまれる涙こて知らるゝまでに袖のぬれけん

絶不知戀

わが戀はくちしながらの橋ばしらふみも通はぬちぎりなるらむ

別戀

別れゆくこゝろを知らば月だにもおもかけこめよありあけの空

恨戀

うき中はくるしや風の葛かづらたえぬうらみの身をいかにせん



近戀

みかはして戀はすれども朝夕のひごめをしげみ逢ふよしのなき

遠戀

君が住む里はそなたとあら雲のいく重へだて、こひやわたらん

披書恨戀

ちぎりおく心あさちの霜のうへにむなしき鳥のあともうらめし

經年戀

見るたびにふるき枕のかひもなし三ごせの塵をかきもはらはで  
わが戀はみたにの岩にむすこけのつれなきいろに年は經にけり

春戀

はつ花のいろに馴れても末つひにうつろひやすき人のこゝろか  
春あさみゆきまもいまだ見えなくにわが戀艸のしたもえぞうき

夏戀

あはれわがちぎりはうすき夏衣うらなくこけていつかあひ見ん  
わが中は夜のほたるを見ても知れもゆる思ひは身のたくひぞこ

秋戀

人老れぬ思ひはくるしきりくす秋のよすがら鳴きあかしつゝ  
よひくの月にやそれと知られなん涙はそでにつゝみはつこも

冬戀

冬來ても枯れなでのこる眞葛葉の人にうらみのあはれいつまで

戀登

すゑかけて結びそめつる玉かつら絶えせぬ中のちぎりこもがな

戀筵

袖のつゆつゝむにあまる草むしろあきしのぶこも人は知らじな



戀硯

おもひあまりむかふ硯のたびごごになけのすさびの手習ぞうき  
ごもすればむかふ硯ぞはづかしき思ふかごごは書きもつくさで

戀笛

笛竹のたゞひごふしの音にこめてふかきなげきを人に知らせん  
いつはりのある世ごしるく笛竹のもの思ふ身のなかのうきふし

戀琴

知るやいかにかきなす琴の音にたてゝ待夜もつらき思そふごは  
つれもなき人の心よいかならんおもひしごごの音にはたつごも

戀扇

秋きての恨みは知らず手に馴れて人にあふぎの名をやたのまん

戀鏡

朝毎にむかふかゝみのくもるこそ物おもふ身のゑるしなるらめ

寄月戀

ゆふまぐれほのかに人を三日月の見かはしてなほ戀ぞまされる

寄月待戀

いだづらに待つ夜もいたく更けにけり契らざりしを山のはの月

寄月逢戀

へだてなくちぎりかはして逢ふ夜半は月も袂にまばゆかりけり

寄月別戀

鳥の音をいごふばかりかわかれ路のうきものご見る有明のつき

寄月變戀

うきひごの心よいかにちぎりしもまごごそらごご月や知るらん

寄風戀



おもふその人にはあらで松にのみここゝふ風のおこぞつれなき

寄雲戀

わがおもひいつかは晴れん夕ぐれの空ゆく雲のさだめなければ  
戀ひ死なん身もかくこそ思はるれながむる空の雲のゆくする  
あまぐものよそに隔て、頼めどもゆくへさだめぬ人のこゝろか

寄霞戀

おもかげをほの見てしよりうす霞ふかくなり行く戀もするかな

寄霜戀

こくるよのちぎりもあれな初霜のむすぼゝれつゝもの思ふ身は

寄電戀

慕へごもはかなかりけりいなづまの影はこまらぬ袖のうへの露

寄山戀

宇都の山うつゝに忍ぶおもかげを夢ごこゝろにたざるほそみち  
人忘れぬこゝろのおくは年経てもいはでのやまの名をや頼まん

寄杜戀

われやうき人やつれなき逢ふこともなきさの杜のつゆの下ぐさ

寄關戀

陸奥の志のぶごすれご立ちそめし名こそその關の名こそつらけれ

寄橋戀

こしを経てうらみながらの橋柱むなしき名のみなにのこるらん  
戀ひわたる心ばかりはかよへごもかけてはかなき夢のうきはし

寄淵戀

ひごこゝろあふ瀬にかはる時もがな今はなみだの淵こなれごも

寄瀧戀



戀ひわびて今はたたゝにやましなの音羽のたきの音に立ちなん

寄浦戀

みつ汐のひるまもわかず袖ぬれぬ猶こりずまのうらみある身は

寄床戀

拂はねばちりのみ積みぬかたしきの床こはにしも人のこはねば

寄草戀

つゝむごも色にやいでん志のぶ草志のぶにあまる露のみだれは

寄薦戀

露けさは妹あるらめやかりごもの思ひみだれてむすぼゝるごも

寄菅戀

おく山のいはもご小菅こしを経て思ひみだるゝこゝろごを知れ

寄松戀

つれもなき色にならひていはしろの松のねたくも見ゆる君かな

寄椿戀

あふ事はかた山つばき咲きいでゝ葉かへぬ色にちぎりおかばや

寄桐戀

人ごゝろ秋かぜ吹けば桐の葉のなみだもろくも散りみだれつゝ

寄鳥戀

春の夜の夢のかよひちそれをだにへだつるせきの鳥の音ぞうき

寄鶯戀

戀すてふ身はうぐひすの谷がくれ音にはなくごも人は知らずや

寄鶉戀

あれまさる人のあき風身にしみてごはれぬ床こ鳴くうづらかな

寄千鳥戀



うき中のちぎりもかくこたくへまし友なし千鳥おのれのみ鳴く

寄鶉戀

思ひのみもゆる夜川にすむ鳥のあなうこのみもなげかるゝかな

寄鷺戀

つれもなきちぎりを知らぬ白鷺もひごりは寐じご暮いそぐらむ

寄獸戀

久方の月毛のこまの手馴れねばかげのみしたふ身をいかにせん  
あふ事はかたわぐるまのうしみつに待かひもなき戀路なりけり

寄蝶戀

さめて後したふもはかな夢のまはこてふこなりて花にむつれつ

寄葦戀

夢だにも人は見えこできりぎりすながくし夜をなき明しけり

寄松虫戀

契りあらばそれこも聞かん松むしの名にはたくへて我をこへ君

寄弓戀

ものゝふのやたけ心のつよくこもあづさの眞弓ひかばよりなん

寄箭戀

武士のやこはこゝろにおもへごもひこの眞袖は引くよしもなし

寄舟戀

きみにかく思ひそめては稻舟のいなごいふこもこひやわたらん  
來ぬ人をなみのよるくまつら船まつこも告げよ沖つ老ほかせ



雜

雲

峯雲

山のはにかゝるご見ればかつ消えて空ゆく雲のさだめなの世や  
あさまだき嵐に晴れていつこよりかへる高根のゆふぐれのくも

關路雲

雲こちて御坂はあはしのこす夜に越えこそわぶれ足がらのせき

澗戸雲鎖

たにふかみ住むこもたれかあら雲のこはに閉ぢたる艸のかり庵

海邊雲

紀の海やなみまにうかぶ島山の見えみ見えすみかゝるしらくも

山

仰ぎみる山は富士のねいつの世の塵よりかくはおひのぼりけん

山嵐

花にのみうらむる人に聞かせばやみやまのおくの松のあらしを

山家

とし経れば峯のあらしも聞きなれて住みよくなりぬ松の下いほ  
すがの根のながき春日もやまずみは花見がてらの人もこひ來ぬ

山家路

世にこほき山のおくにも道はあれご柴のいほりを誰かこふへき  
ふみ分けてこはれし跡も山かげは苔のみごりにのこらざりけり

山家嵐

よのなかの花も紅葉も松の戸はよそにへだてゝあらし吹くなり



山家煙

住む人のありさばかりに眞柴たくけぶりにあるき深山へのおく

山家夜

山里はぬるがうちこそなかくに浮世にかへるゆめを見るかな

山家水

よの中のごりにしまぬころより聞けばすみぬる山の下みづ

山家鳥

やまざこはさびしくもあるか雨そく軒ばにちかき山鳩のこゑ

山家虫

月さゆる山したいほのあはれさよいかにせよこか虫の鳴くらん

名所野

むかし誰れ秋は嵯峨野とめでそめし干草みだれて虫もなくなり

萩のはな咲きにはふころは露わけてめではや秋の宮城野のはら

田家

むらさめの過ぐるを見れば庵あれて山田のなる子ひく人もなし

田家鳥

たぐひなくさびしくもあるかほのくご明る門田の鳴の羽がき

河

むかしより名におふ月のかつら川なみもはな咲く秋の夜半かな

川筏

吉野川木の葉吹きおろす山かぜに早瀬のいかだ棹もさしあへず  
おほる川いほしがしはのゑらなみにはや瀬の筏すぎぞわづらふ

池

むらさめの過ぎゆくあこの水のうへにやがて晴れたる池の中鳥



海路

みちじほにかつをよるらし漕ぎつれて伊豆の海づら船ぞ數そふ  
武庫の浦やけさの追風に眞帆かけて和田のみさきを出づる船人

海村

世を渡る習ひもあはれいさりするいとまなきさの蟹のいへく

名所汀

くもりなく澄みこそわたれ玉のうらのきよき汀にやごる月かけ

名所潟

難波潟あしのひこ夜はゆめなれや漕ぎ行くふねに残るゑらなみ

夕陽映島

あかしがた波の干さこのくも晴れてゆふ日にみがく淡路島やま

船

111963

なみ風のをさまれる世は四方の海みつぎの船のゆきゝ絶えせぬ

閑中燈

こもし火の影かすかなるあはれさを思へむぐらの宿のあけくれ

曉鐘

燈火のひかりも薄く見るがうちにあかつき告ぐる鐘のこゑく

草庵雨

さらぬだに艸のいほりの露けさにまた袖ぬらす夜半のむらさめ

古寺

入あひのかねのひゝきをこめ來れば松よりおくにすめる古てら

苔

いはだゝみ人來ぬ山はおのづからつゆのふるみち苔むしにけり

小篠



岡のへの松のあらしの吹き落ちてるげくみだる、玉ざ、のつゆ  
竹

すゑ葉より落ちくる露のおご聞けば雨のなごりの軒のくれたけ  
松

いくたびか生ひかはる竹の庭のおもに植ゑしまゝなる松の一本  
夜なくの手なれの琴にかよひ来てわがごもがほの庭の松かぜ

椿

仙人に馴れて八千代のいろ見よごみねに生ひそふ玉つばきかな

榊

千代かけし君がかざしはこれぞこの葉かへぬいろの榊なるらん

曉更鶏

ごりの音はつげわたれごもよそよりは明くるもおそき山の下庵

八聲なく鳥のはつ音に見わたせばごほやまのはに月かたぶきぬ

鶴立洲

みればけに寄せくる波の沖津洲によそめまがはぬ鶴の毛ごろも  
風あらし沖のしらすに寄るなみのこゆかご見えて立てる友づる

名所鶴

松風のこゑうちそへてゆふしほのみつの濱べに田鶴なきわたる  
かぎりなく継うちむれて住む鶴の千ごせをちぎる松がうらしま

轟橋行人

たび人の袖さむからし音たて、さわぐあられのこゝろきのはし

旅行

知らざりきうきはならひご出しかが野山の露のかゝらましごは  
やごからん方やいづごごいそげごもまだ里ごほき武藏野のはら



旅宿

こゝろなき嵐このみぞなげかるゝ松がねまくらゆめもゆるさで

旅泊

風あらいきそのうき寐のうきまくら浪のよるく夢ぞみじかき  
おきつなみ寄するみなごに船こめていそへの枕ゆめも見はてず

鞆中湖

旅びごは八十のみなごを漕ぎいでゝ矢橋のわたり今か行くらん

鞆中渡

たび衣ひご夜ふた夜ごまくらがのこがのわたりに宿りをぞこる

月似古

ものいはゝむかしの事をこひてまし面がはりせぬ月にむかひて

月似鏡

あめにます豊岡ひめのかゝみごやくまなき月もみがきそふらん

月前管絃

照る月のひかりを今よひかよはしてあらべもすめる琴笛のこゑ

僧侶對月

墨ぞめのころもの身こそやすげなれ野ぶし山ぶし月をながめて

翫月

くもりなきみ空の月のますかゝみ幾千代かけて見るべかりけり

憐月

見るひとのこゝろぐに月やすむ草のいほごてかけはへだてじ

思月

ごころから光もさぞごおもひやる須磨のうらわの秋の夜なく

對月言志



大空の月のひかりをあふぐにもたゞあきしまの道をしぞおもふ

寄星述懐

かづくに君がひかりをあふぐぞよ星のくらゐの高きためしに

寄霜述懐

秋の露おきふしものをおもふまに霜となり行く身をぞおごろく

名所述懐

よしあしもいかに恨みん津の國のなには思はぬあはれ世のなか

獨述懐

人ごゝろくらへあはせて世の中にひとり苦しき身をなげくかな

懷舊

ごもすればふりにし秋の忍ばれてながむる月のかげぞ身にしむ

ながらへて昔のまゝのふることを思ひいつればげにうかりけり

夢

夢のうち心まゝのたのしさはさめての後もなくさまれけり

無常

草の露はちりても跡におくものを消えてかへらぬ人のほかなさ

衣

みやぎ野やつゆのかごに秋はぎの花ずりころも色ぞうつろふ

元服

こむらさき千代のゆかりの行末をはつもとゆひに結びおかまし

七夜

生ひそむる二葉の小松いく千代のさかえをかけて契るゆくすゑ

夜釋教

つたへこし法のむかしをあふげこや鶯のたか根にすめる月かけ



王昭君

おもひきや馴れし都を立ちいで、知らぬさかひの月を見んこは

伊勢

末かけてなほうごきなき神路山たかきめぐみをあふぐたふごき

稻荷

ねぎごを誰もかくらんなり山あるしの杉のゑるしあれこて

出雲

散りうせぬたゝしき道のここの葉をあふぐもひさし出雲八重垣

三輪

三輪のやまその名も高きかみがきのすぎの老木や宮ばしらなる

大原野

おほ原やをしほの山にあこ垂れてかみさびにけり松かぜのこゑ

寄天祝

岩戸あけし神代のまゝのあまつ空かくれぬ國をあふぐかしこさ

寄風祝

かみ代より吹きつたへてや民艸のなびきそめたる風はたえせぬ

寄竹祝

此きみを千代のはやしこなみ立ちてかしこき人や友ごめづらん

寄松祝

うごきなき神代のもごあふぎ見ん千たび花咲けすみよしの松

寄椿祝

はる山に八千代へぬべきいろ見せてあら玉つばき花や咲くらん

寄月祝

天がしたくもらぬ御代と照る月のひかりをあふぐ秋津洲のたみ



寄弓祝

ものゝふの治まる御代にこる弓は君をまもりのためしなるらむ

寄民祝

朝な夕な民のかまごに立つけぶり治まる御代のすがたをぞ知る

寄國祝

あま照らす神のめぐみに秋津洲やいまもさか行く四方の民ぐさ

寄道祝

盡せじな御代のさかえとあふぎ見る大和しまねのここの葉の道

詩之部

立春

漢殿彩花已上頭。幾村簫鼓策春牛。東風吹滿城南路。早有佳人拾翠遊。

梅

霜葩雪萼幾枝開。疎影淡粧無點埃。半夜空山魂欲斷。月邊髣髴美人來。

紅梅

綽約幽姿澹有香。臙脂朶朶傲冰霜。春寒殊怪粧還艷。應是佳人醉玉漿。

立秋

嫋嫋風從昨夜涼。梧桐葉墜漏初長。起來時倚高樓坐。微雨淡雲韜月光。

栽竹

半夜妍妍明月來。數竿清影傍窓開。雖然桃李非無賞。孰與瀟湘君子栽。



雪竹

脩竹竿竿北牖前。朝來帶雪更清妍。千秋高節柔難折。一片貞心瘦益堅。  
銀葉壓牆真畫本。玉枝當戶好詩篇。幽人亦有子猷癖。最愛此君常挺然。

詠鶴

高標落落自仙禽。顧視軒昂鳴在陰。頂戴丹經千載壽。翅欺雪見九霄心。  
霜華滿地聲相警。月色升林影可尋。未得倩君游閬苑。去來吾愛白雲潯。

元日

萬里山川淑氣回。曈曈旭日照樓臺。眼看梅柳千門曙。笑把春風酒幾杯。

同

良辰有雪好年華。豐瑞何論五色霞。賓客今朝經過少。一壺春酒對梅花。

元日寄世龍侯

侯伯衣冠萬國親。氤氳淑氣滿城闈。芝溟初旭出波曙。富嶽祥烟籠雪新。

黃鳥今朝纔學轉。白梅幾樹已含嚙。絃歌戶戶昇平樂。遙想名都第一春。

汲江煮茶

煎茗幽窓鎮日閑。芳香自溢齒牙間。呼童試問瓶中水。汲得清江第幾灣。

清晨茗酌

月殘星少曉鴉寒。盆水假山開戶看。坐喚侍兒還煮茗。一瓶清氣勝仙舟。

題山水畫六言

連山迥疊青黛。飛瀑高懸白虹。一片帆銜夕照。數行雁下秋空。小橋歸去  
樵客。斷岸逍遙釣翁。

元夜

都門夜靜月華開。火樹爛珊百尺臺。羅綺花迎車馬客。幾家絲竹送春來。

夏夜

赫日烘窓雲氣屯。忽看飛電雨傾盆。晚來枕簟涼如水。一陣南薰恰可人。



螢

向晚微涼可半庭。池塘點點綴流螢。夜深窗外齊飛去。不是雲霄也見星。

池亭賞蓮

一陣風來雨點涼。婷婷濯出美人粧。綠霑紅膩嬌無力。十里荷花玉露香。

湖上梅花

春湖縹緲水涵沙。老幹疎枝齊放花。花氣波光相掩映。香風吹月落漁家。

花月吟次佐賀侯見寄韻以答 佐賀侯鍋島閑叟

步月落花香撲人。弄花偏好月中春。月花不管悲歡事。花月長隨夢幻身。月影籠花花更麗。花神罩月月相親。及時只合醉花月。月亦盈虧花亦塵。

花月吟次小倉侯韻

百花方發月明時。月白花紅總可怡。花帶微風搖月影。月篩湛露灑花枝。有花無月花猶寂。有月無花月不奇。今夜月花兩相得。千金花月大蘇詩。

花月吟次宇和島侯見寄韻答謝 宇和島侯伊達春山

滿城夜色月花娟。澹月一輪花一川。月影圓圓花外照。花香馥馥月中傳。月籠花處風纔動。花帶月時露亦鮮。春月春花長不改。醉花吟月幾年年。

夏意

深深小院樹陰橫。一陣南薰枕簟清。睡起閒來讀周易。隔牆時聽午鷄聲。

折楊柳

春風送汝倚河梁。楊柳青青驛路長。休唱渭城朝雨句。離歌三疊斷人腸。

夏日山行次肥前侯韻

藜筇偶向碧山經。寂寞深邨戶半扃。洞口龍歸雲作馭。岩腰鳥宿樹藏形。千尋飛瀑雲中白。數點奇峰雨後青。行到路窮溪盡處。披襟佇立一茆亭。

同

人間苦熱想三冬。欲避炎威曳竹筇。傍澗新蓮紅露浥。懸崖老柏翠雲重。



蒼蒼遠嶂渾如黛。灑灑清泉好洗胸。坐見歸鴉帶殘照。晚風吹送一聲鐘。

秋夜聞雁

數行雲雁過幽庭。那耐聲聲帶雨聽。墜葉蕭蕭簷滴冷。終宵點盡一閑亭。

題桃源圖

兩岸桃花一水源。烟霞鷄犬數家村。始知樂境斯中在。大蓋是乾輿是坤。

歸雁

燕山瀚海路茫茫。却負春風向北翔。恨殺雲程千萬里。聲聲啼月一何長。

秋曉

一碧瑠璃月露明。夜深庭砌候蟲鳴。愁來孤枕眠難就。時聽隣鷄報曉聲。

雪望

頃刻園林忽發花。聯珠綴玉淨無瑕。天風一陣繽紛舞。疑是廣寒仙女家。

同

天翻白雪變山容。萬樹未春花已濃。滿地月明疑不夜。樓臺十二玉重重。

聞鶻

江城夜雨暗江雲。杜宇聲聲枕上聞。啼破鄉園千里夢。殘燈無焰淚紛紛。

雨中春望分韻得秋字寄川越侯

霖霖連空晚未收。金罍縱目倚高樓。半篙新水孤邨外。幾片層雲遠嶺頭。花帶淡烟如隔障。鶯藏深樹似含羞。誰知春野絲絲雨。織出黃梁他日秋。

對菊

淡黃純白帶霜寒。三徑芳香秀可餐。欲擬先生籬下醉。採花猶對綠樽看。

牽牛花

殘蟾影裏更多愁。綠蔓依依態亦柔。休謂殘粧三夏盡。滿身風露也宜秋。

野莊聞蟲

溝渠水落蓼花秋。月白風寒露氣幽。蛩韻不知哀樂事。令人聽取自生愁。



秋夜

梧桐葉墜客愁添。風送商聲夜氣嚴。明月當簾白於雪。何來雁影落高檐。

山莊月夜

松徑雲深蘿薜繁。空山半夜月臨軒。任他猿鶴來相狎。匹似龐公在鹿門。

冬夜即事

池亭疎竹影團欒。斷雁聲中碧玉竿。月自娟娟霜自白。孤檠擺落夢魂寒。

冬夜聞雁

半夜風霜利似刀。迥聞斷雁過江臯。鄉書欲寄愁多少。可耐聲聲逐月翱。

春日泛舟

一棹仙槎溯水湄。櫻花如雪柳如絲。吟哦我亦忘機久。幾隻閒鷗總不疑。

春日山居偶作

三公不換一茅廬。深鎖柴門與世疎。半部南華看未了。前峯春月上空虛。

遊春

日暖千林鳥語長。殘花滿地馬蹄香。欣看稼穡邛邛遍。沃野宛然君子鄉。

春江釣魚

險囑魚戲碧波平。岸柳汀花映眼明。敢說當年渭水事。一竿風月笑功名。

花下步月

淡月籠花烟罩柳。中庭移步微吟久。千金一刻不吾欺。風送清香吹入酒。

小池殘暑退分韻得池字寄小倉侯

簾纖雨過暑消時。秋意稍看生小池。楊柳戰風驚鴨子。荷花裊露戲魚兒。當軒細竹香侵席。遠檻清波冷透帷。忽見一鈎林吐月。清輝滿地促新詩。

同得退字

日午濃雲何霍霍。輕雷輓輓雨成隊。圍端篁竹翠烟繁。池面芰荷零露碎。戢翼時無棲鳥鳴。潤田何用老農漑。一天如洗晚來晴。風送新涼炎氣退。



春日郊行

東郊十里野禽啼。徐步晴光花滿蹊。日暖村々農事起。一年豐歉在春犁。

冬日

朔風吹雪浹三旬。何以迎年饑凍民。蹴作玉塵驕白馬。少年誤擬百花春。

雪意

朔風獵獵滿高城。連日同雲不放晴。羸馬瘦牛依柵臥。饑鴉凍雀集林鳴。圍爐愛此松醪熟。呵筆看他冰柱清。雪意黃昏十分好。艤舟定有子猷情。

秋園踏月寄川越侯

清宵皎皎月升東。移步前庭趁晚風。露綴草頭蛩織夜。雲披天際雁書空。桂花香自吹衣冷。池水光其與鑑同。君子履霜情更切。莫令肅氣滿芳叢。

同分得庚韵

醉後從容步月明。滿天秋色自凄清。叢間露滴吟虫咽。樹杪風寒宿鳥驚。

禾穗夾蹊多野趣。桂香吹袖爽詩情。嫦娥應是傳消息。忽聽雲端鴻數聲。

惜花五首節一

百花爛熳滿前溪。一夜狂風吹委泥。芳歇香銷春已去。重重深樹鳥空啼。

同

狂風狂雨晝冥冥。已見前山新樹青。賴有掃愁依酒力。花泥猶愛醉魂馨。

初秋池亭夜坐

炎威初謝嫩涼生。夜坐池亭月影清。細浪搖時看魚躍。綠莎深處聽虫鳴。

初夏

簾纖細雨洒垂楊。黃雀看他風自涼。舞蝶不知春老盡。飛花庭院趁殘香。

子規啼

三更啼破萬山雲。杜宇聲從月裏聞。回首天涯何處所。夢魂一夜又思君。

初冬夜坐



半夜雲銷月照庭。數行過雁下青冥。蕭然殘燭支頤坐。落木寒泉不可聽。

寒曉

霜白風寒叫曉鷄。數聲清磬出招提。起來閑整朝衣坐。簾影模糊曙色迷。

落日望鄉

烟籠遠水日銜山。塞雁飛來人未還。地角天涯何處所。獨憑高閣望鄉關。

一雨乍涼

城角風生龍氣腥。蟬聲乍斷畫冥冥。捲簾銀箭紛紛亂。失却前巒一抹青。

同

驟雨沛然如決川。怕看飛電落雲邊。須臾洗盡人間熱。一榻涼風聽竹眠。

秋水次小倉侯見寄韻

江水遶山螺髻浮。柳烟蘆雨罩還收。星搖石出魚龍夜。雲遠帆飛鴻雁秋。萬頃涵藍天杳渺。一痕磨鏡月清幽。古來樂事真難遇。付與年華蕩蕩流。

中秋無月

頑雨癡雲玉兔藏。暗中唯聽桂花香。家家虛負中秋賞。不見青霄一夜光。

宿漁家

江若琉璃散殼紋。一痕纖月出殘雲。青樽有酒心如水。坐聽漁歌到夜分。

夏夜月下

風生殿閣滿庭涼。一抹輕烟掛綠楊。月淡星稀夜將半。驚禽五六出林翔。

春城晴望次佐賀侯見寄韻

城北城南二月天。輕寒輕暖軟晴前。誰家芳苑花敷錦。幾處長堤柳帶烟。飛燕啣泥新雨後。歸鴻避弋斷雲邊。眼看春色都如醉。落日蒸霞紅滿川。

至日尋梅

微陽昨夜迸爐灰。谷口先開一朵梅。已有江南春意早。何人雪裏問寒來。

詠雪七首節一



六出花飛花滿林。千山如削玉爲岑。高情不啻剡溪棹。更想灞橋驢背吟。  
寒雨殘楓

風吹沙岸雨聲寒。十月江頭楓半殘。蕭颯林疎煙送白。繽紛葉落浪漂舟。  
漢旌已靡巧難奪。蜀錦纔裁工未完。眼底自今無景物。待他蘆荻雪中看。

楓落吳江冷

吳門秋老颯霜風。落盡江頭幾樹楓。彩錦千重遙蘸浪。赤霞十里欲燒空。  
魚龍寂寞蒹葭外。鴻雁飛翔烟霧中。天際烟波波際月。孤篷不繫任西東。

午窓坐睡

公退悠然一事無。閑憑桐几入華胥。侍兒爲報茶爐熟。睡覺前林日欲晡。

賞花

每值芳春鬪麗姿。紫紅濃處蝶蜂痴。滿林韶景如斯好。莫遣狂風特地吹。

春山看花

短堤風暖柳成陰。雲滿春山花滿林。曳杖徐聞黃鳥嘯。意行不覺夕陽沈。

春日

殘紅嫩綠雨初晴。燕子飛飛風外輕。簞笠幾群驅犢去。綺羅一隊踏花行。

十五夜

萬里雲開似廣寒。滿天明月影團圓。鳴琴吹笛人皆賞。何處今宵不倚欄。

中秋四首節一

不是尋常三五看。姮娥皎皎露溥溥。深宵獨坐南樓上。一段清香桂樹寒。

中秋七律

桂花香滿月華明。流影今宵分外清。何處疎砧思萬里。誰家長笛欲三更。  
光侵池面魚方躍。寒逼林梢鳥屢驚。羈客添愁吟客醉。榻來新雁一聲聲。

初聞雷聲

昨宵微雪今朝雨。二月輕風料峭寒。忽聽雲間雷鼓響。一聲合起蟄龍蟠。



暮春山居

幾年逃跡住青山。五柳門前白日閑。一鳥不啼花散亂。孤雲無意水潺湲。

泉

千尺飛泉崖上奔。疑看素練撼雲根。夕陽樹色來相映。風景何輸五老尊。

山人彈琴二首節一

靜坐幽篁獨撫絃。疎雲皎月影娟娟。高山一曲峩峩調。雲鶴踟躕下九天。

獨釣寒江雪

簌簌寒江雪滿山。風簑薄暮釣清灣。孤篷暫繫橋邊柳。幾隻鱗魚換酒還。

竹月

澄天如水月光寒。吹動幽園竹萬竿。流影碎珠聲戛戛。清涼還做渭川看。

秋日山居五首節

山中茅屋絕塵喧。西嶺秋高嵐氣繁。瘦竹風清朝入戶。喬松月冷夜臨門。

時看荒樹巢鷓鴣。靜對懸崖抱子猿。經籍終年無一事。樂天獨與古人論。

其二

獨臥逍遙洞裏天。從來此境絕人烟。林園秋熟新虧粟。池水風寒半倒蓮。出岫悠悠雲自靜。當窓皎皎月方懸。山中讀易饒幽意。茅屋松巖復幾年。

其四

秋靜山園鳥雀馴。遠門修竹自無塵。千林楓葉紅迎客。三徑菊花黃可人。采藥釣魚堪避世。開樽散帙足容身。從來琴酒陶潛興。但愛醉醒能守真。

其五

家住孤峯南澗濱。霜寒木葉落紛紛。琴書室靜懸秋月。松竹徑幽籠暮雲。北海龍蟠未驅雨。南山豹隱欲成文。逃蹤不管人間事。擬向滄洲伴鶴群。

成趣園十景

阿蘇白烟



蘇嶽削成千萬丈。群峰嫋嫋似蓮花。祥烟鬱勃神池頂。莫是赤城仙子家。

飯田夕陽

湖東一角飯田山。積翠倒瀾流水灣。溟谷吞虹新雨霽。夕陽影裏暮鴉還。

健宮杉嵐

憶昔西征閱兵地。健軍祠古水東南。老杉猶訝翻旗影。一帶蒼蒼起夕嵐。

國分晚鐘

雲收遠嘯夕陽春。楓葉蓼花秋色濃。砂鳥橋西國分寺。水烟深處度疎鐘。

立田紅樹

立田山上澹秋光。千樹如花已飽霜。點綴名藍真似畫。紅雲不散送斜陽。

瀨田山雪

風拂凝雲積雪新。瀨田山色麗清晨。連峰凹凸寒空外。皎皎無林不碎銀。

松間新月

微茫只見暮雲橫。磨出蟾輪一片明。萬樹松間皎如玉。漏將清影儘多情。

前林櫻花

樹樹風輕春暖時。瓊花燦燦競芳姿。若無紫蝶黃蜂過。疑是三冬雪滿枝。

岩泉清流

岩下清泉脉脉流。最宜三伏納涼遊。半泓纔是濫觴水。里許已浮千斛舟。

水隈亂螢

趁涼緩步下沙汀。上下齊飛萬點螢。掠水撲風何燦燦。或疑夜半隕群星。

船發鶴磯

絃歌朝發白嵩川。豫尾豐頭望渺然。三十六洋春浪穩。千帆直破海門煙。

入京

鴨川如帶繞皇京。叡嶽千年擁鳳城。一自桓王定神鼎。至今四海仰昇平。

琵琶湖



長風立馬瀨田橋。縹緲水雲帆影遙。天女宮從烟外見。竹生嶼自鏡中描。

擲筆山

鹿鳴何處覓遺蹤。春暮來過擲筆峯。一醉振衣臨絕壑。怪巖如虎樹如龍。

矢矧橋

架岸一千三百尺。長橋宛似半空橫。白沙翠竹斜陽裡。人在蒼龍背上行。

原驛望嶽

萬仞芙蓉何兀嶽。我來仰止心如失。峯開八朶聳青空。雪壓三州壓白日。

過起鵲驛

老龍橫路萬松欹。懷古徘徊欲問誰。花落烏啼春寂寂。時看行客撫殘碑。

六鄉川圖

殘霞落日血痕紅。恍見雲龍激水風。矢口渡頭千載恨。英魂不返逝波中。

湊川懷古

憶昔南柯夢神遇。水魚之契酬恩顧。孤城挫敵計何奇。三代勤王忠是務。難奈九州狼虎蟠。無由八陣風雲布。湊川萬古自流芳。不朽嗚呼楠子墓。

初春次肥前侯見寄芳韻答謝之二首

文章君慕漢相如。寂寞吾耽楊子居。歸雁向鄉花發日。流鶯求友雪消初。茫茫紫海雲千里。鬱鬱青林風一梳。芳草池塘春入夢。新詩并謝故人書。

其二

有土徒期善政名。每憂功未洽蒼生。營中唱和空相憶。世上聲聞恐誤情。繡口錦心吾避易。筆鋒詞戟孰橫行。雄篇海內應無敵。何讓長卿五字城。

再次肥前侯見寄前韻

再會佳期應不愆。春風先想武昌城。園林日暖鶯歌靜。樓閣烟濃燈影橫。花月扁舟牽醉夢。弟兄同社訂詩盟。待君述職秋冬際。髣髴如看墻與羹。

寄懷佐賀侯在藩



一別以來經九夏君歸佐賀我熊城政閑定識絃歌起書絕不看鴻雁橫  
紫海長風難破浪武昌花月負同盟秋光各地與誰語只愛鱸魚蓴菜羹  
次肥前侯見寄懷約以酬

雙鯉迢迢楚越如交情雖切奈離居雲仙山畔鴻來處豐女詞邊月上初  
料識求賢頻握髮獨慚高臥每慵梳秋風樓閣相思夕謾賦新詩燈下書

其二

西藩誰不仰雄名瓊浦閱兵豪氣生爲政偏宣天子德論交何忘弟兄情  
別來秋月春花過追想青山白水行莫謂賜休音信絕熊城夜夢繞榮城  
曩者邦內有風水之變細川渡子見寄佳篇因走筆以謝  
忽有飛鴻尺素新披緘情意喜津津邦家倚賴藩屏任水旱偏憂昏墊民  
莞爾德風敷百里森然筆力重千鈞詞篇亦見廟堂計絕勝當年趙璧珍

文之部

道の記

こころし天保三の年の卯月に、

君より御いごまたまはりて國へ歸り侍ること五月朔日といふに、  
龍の口の館を立出んごするをりしも、そらさへうち曇りて、人々  
にわかぬるごころは、あはしごおもへご、かなしくて、

せきあへでおつる涙をこゝめかねまだ露わけぬ袖ぞぬれける  
午のはじめごろ、門出しはへること、

旅衣けふたちいづるあづま路の名残はてなきむさし野のはら  
ほごなく、あろかねの御館につきて、御二所の君に、御いごま申し侍  
れば、おほみき給りて、ごりく、御名残は盡させぬものから、門出の



ならひ、こゝろいそがれて、若ろかねの御館を立いでぬ、品川のむま  
やもすぎ、大森てふ處に若ばしやすらひけるほごに、永田町より、御  
はなむけきて御便あり、いろくの菓子ごもたまはりぬ、

かしこしな深き惠のかゝるよりなほ露そふるたびのころもて  
このあたり、むかし、荒蕨がさきこいひけるよし聞えければ、

若ら波のあらゐがさきを越えきつゝ、むかしをこへば松風の聲  
日もかたぶくころ、川崎のやごりにつきぬ、

けさまでは思ふここのは川崎を旅のわかれのはじめこやせむ  
こゝまでは、若ろかね龍の口の人まありつごひて賑しければ、み  
きくみかはして、ふしごに入りぬ、

二日

きのふにおなじく、そら曇りぬ、川崎のむまやを立出で、程が谷もう

ちすぎ、境木てふ處に若ばしやすみけるに、このころは、武藏と相  
模との境なるよし聞えければ、

名残あれや、馴し武藏も行くしけふ相模路へかゝると思へば  
ほごなく、戸塚のやごりにつきぬ、

三日

夜明けて戸塚のやご立出づるに、けふもきのふにおなじく、そら曇  
りて、小雨ふりぬ、藤澤のむまやも行きすぎて、江の島の道あり、十年  
あまりのむかし、この神やしるにまうでしこと思ひ出して、

むかし我まうでしこごもおもひ出でいのる心は神ぞ知るらむ  
馬入川うちわたり、平塚のむまやもすぎ、花水橋こいふにきたりぬ  
るに、杜若の花の咲きしを見て、

なほこゝに春をこゝめてかきつばた色ぞうつろふ花水のはし



あばし、このごころにやすらひて、大磯をこほりしに、鳴立澤にて、か  
すかなる堂のうちに、西行の像を安置せり、

いまでも猶むかしの跡や志のばれむ志きたつ澤の秋はいかにこ  
酒勾川うちわたりて、申すぐるころ、小田原のやごりにつきぬ、

四日

けふは箱根山をこゆこて、夜をこめて小田原のむまや立出しに、す  
こし雨ふりて、明行くそらも、ほのぐらく見えぬ、

あかつきの八聲の鳥ごもろごもにけさ立いつる小田原のやご  
夜明て雨やみぬれご、猶曇りて晴れやらず、山路を一里ばかりのほ  
り、湯本てふ處の前に、谷川の音高く清く流るゝを見て、

あらなみはせゝの岩間にくだけつゝ音もすゝしき谷川のみつ  
けふは東の方も、雲にへだゝりて見えず、いごゝおもひやりて、

かへりみる武藏の方をこゝろなく幾重へだつる雲もうらめし  
猶登りてゆくに、雲もあだいに晴れぬ、折ふし、時鳥の鳴くを聞て、  
あづまより語らひきつゝ箱根山なれも旅ごや鳴くほごゝぎす  
ほごなく、關にいたりぬれば、

四方の國治まる御代のあるしこて關もござゝでけふぞ越ける  
はこねのむまやにやすむ、そこに廣橋ごのゝ歌こて、主の額になし  
てかけぬるを見るに、仰山鑑水といふごこを、

山をあふぎ水をかゝみに動きなく心くもらずやごにすむらし  
ごなんありつる、またそのかたはらの額にはこね一の本陣にて、父  
子相つゝき敕使にてふじをみるごこも、君恩かしこまりて、

君の惠あけくれあふぐ箱根山かぞのごまりごおなじやごりは  
箱根山ちゝのもごみし一の夜にふたゝび我もめづるふじのね



こなんあるげにこのところは向ふにふじもみえ前に湖水ありて、  
ながめいごよしけふは曇りて見えず、若ばしやすらふほごに、雲も  
や、晴れて富士もすこし見えぬるに、うれしくて、

我もまた君の惠のかゝらずばけふこのやごにふじをみましや  
この山路は名たゝるけはしき道なるに、夜への雨にて、岩かごなめ  
らかに、ひちりこふかくして、ゆきなやみぬ、日のいるころ、からうじ  
て、三島のやごりにつきぬ、このむまやは、三島の神の御社、かみさび  
ていごたふごく、かしこければ、

いのるぞよまたこむ春に立かへり猶もみしまの神のめぐみを  
ほごゝぎすを聞て、

もろごもに山路や越えし草枕かたらひがほに鳴くほごゝぎす

五日

卯すぐるころ、三島のごまり立出しに、雨すこしふりて、明行く空も  
ほのぐらくなりぬ、巳の刻ごもおぼしきころ、空はる、けふは名にお  
ふふじをながめばやご、たのしみしに、原のむまや行過るまでも、雲  
かゝりて見えざりしかば、いごくちをしかりしに、よしはらのむま  
や近くなりて、雲やゝはれ、ふじのみえければ、うれしさの餘りに、  
きてみればいよく、高きふじのねや雲より上にふれる白ゆき  
浮しまが原をみて、

ふじのねやすそのをかけて見渡せば、心も空にうきしまがはら  
午満るころに、ふじ川にきたりぬ、流れもいと清く、うち渡りて、

乗りて行く駒にやかはん淵も瀬もきよきながれのふじ川の水  
このあたり、吹上のはまごいひけるよし、聞えければ、

ごきならぬ雪かごばかりうら風の吹上のはまにたてる若ら波



暮がたに、蒲原のむまやにつきぬ、このところは、荒磯ちかくて、よすがら、なみのおこの聞えければ、

六日  
あら磯によせくる波のおご高くかたしくそでの夢ぞくだくる

蒲原を立出で行く、けふもきのふにおなじく、きり立こめしが、ほごなく晴れて、日のひかりもいでぬ、由井もすぎて、薩埵山にかゝりぬこのあたりを、田子のうらこて、眺望もすぐれて、海道第一のおもしろき所なれど、けふは曇りて、ふじも見えざれば、くちをしくて、名にしおふふじの高ねはうづもれて雲にぞつゝ、田子の浦波たこの浦やふじのたかねは雲かけて雪にぞまがふ沖つ白なみ興津をすぎて、そら晴れぬ、このあたり、そで師がうらこいふをき、

故郷を去のふなみだに浪ならで袖師がうらにはすひまぞなきすこし行きて、清見寺こいふ所あり、この處は、向ふに三保の松原みて、風景いはんかたなし、

よせかへるゑら波こほく見渡せばみごりぞうかぶ三保の松原ほごなく、府中のむまやすぎて、丸子のやごりにつきぬ、

七日

丸子をたちいつ、けふもきのふにおなじく、そら曇りて、ほごなく、うつ山にかゝりければ、蕨の細道のふるき跡をたづねて、

うつの山うつゝにわくるあさぎりや夢路をたざる蕨のほそ道ほごなく、岡部のむまやもすぎて、藤枝にゑばしやすらひ、午満るころ、島田をすぎて、大井川をわたる、

こゝもまた名にながれたる大井川みやこ戀ひつゝ、人や渡らん



金谷のむまやもすぎで、さよの中山にかゝりぬ、

ちぎるぞよまた來む春も道ひろくかはらず越えんさよの中山  
日坂のむまやちかくなりぬれば、日も入りぬ、このころは、そら曇り  
て月も見えず、今宵めづらしく月をながめて、

旅衣きのふのそらにひきかへてうらめづらしくすめる月かけ  
こひしたふ心にふかくながむれば月にも君がおもかけにたつ  
ほごなく、掛川のやざりにつきぬ、このころよりは、あづまの方に  
便あれば、

みせばやと思ふ心をおしこめてみじかき筆にかきぞのこせし  
八日

掛川のむまや立ちいでしに、夜への空猶晴れて、けふはよき日和  
はなりぬ、一里ばかりもゆきて、原川てふところは、川の流も清けれ

ば、あはし、このところにやすらひて、

すむ人のこゝろもさぞくみて知る清きながれのはら川の水  
袋井見附のむまやもうちすぎて、天龍川といふをわたりて、猶行く  
に、濱松のむまやちかくなりぬ、ごおもふところに、馬籠橋てふあり、  
こゝは江戸と京の中なるよし、人々のいひけるを聞きて、  
東路のなかばご聞けばこしかたも都のそらもほごぞはるけき  
濱松のむまやに、日のかたぶくころつきぬ、

九日

濱松を立いでしに、明方雨ふりぬれど、あはしにてやみぬ、二里はか  
りもゆきて、舞坂のむまやより、いまぎれの船に乗りぬ、ふねのうち  
にて、そらよくはれて、丑寅のかたに、ふじのみえければ、  
空晴れてけふこぐふねに思ひきやふじの高根の雪をみむこは



けふは波風おだやかにて、あら井につきぬ、ふねよりあがりて、關をも通りすぎ、このむまやにやすらひけるうちに、關守の何がしも訪ひきたりぬ、濱名の橋はいづこにかありけん、こゝなむ橋本にて、あらはなるゑづの家のみありける、

むかしべをこへごも今はあごもなくたゞ橋本の名のみ残りりゑほみ坂をこえて、ゑらすがのむまやに、ゑばしやすらひて、二川吉田御油のむまやゝもうちすぎで、暮過るころ、赤坂のやざりにつきぬ、

十日

夜明方に、赤坂のこまり立出しに、そらくもりぬ、藤川のむまやをすぎて、岡さきのむまやにきたり、矢矧の橋本に、ゑばしやすらひぬ、このはしは海道第一の橋なり、

武士の矢矧のはしの名にめで、をさまる御代にわたるたび人二里ばかりゆきしに、雨ふり出ぬ、池鯉鮒のむまやにやすらひ、鳴海のむまやにて、思ひつゝける、

東路のひこごも遠くなるみがたなほゑたはるゝ君がここのは雨もいよゝふりて、申すぐるころに、熱田のやざりにつきぬ、

十一日

けふもまた、きのふにおなじく雨ふりて、風もおだやかならざれば、桑名のわたりのふねはいでざれば、さやへ廻るべしとて、夜あけて、熱田のやざり立出ぬ、こゝの御社に詣でんのこゝろざしはありながら、何くれと、こゝろにまかせねば、よそながらふしをがみて、

あつたなる神のめぐみを仰ぎつゝ、心のうちにいのりてぞ行く夜べよりの雨にて、道もあしければ、からうじて、岩塚といふところ



にきたりしに、風つよく吹き、雨もあきりにふりて、いさむくおぼえぬ、あはし、この所にやすらひて、

春過ぎて日かずへぬれど風さえて夏もたれかいは塚のさこ神守のむまやにきたりければ、雨もやみ風もなきて、そら晴れぬ、さやより川ふねに乗りて、申のはじめころ、桑名のやどりにつきぬ、よひは空はれて、月隈なかりければ、

このごろの旅の衣のものうさもわすれてめづる月のさやけさあはしながめてふしぬ、猶夜半に目覺せしに、をりふし、千鳥のなきければ、

草枕さびしきここに夢さめてなほあはれそふ千どり鳴くころ

十二日

夜明て、桑名のむまやたちいでぬれば、ほごなく、日もさしいてぬ、四

日市のむまやを過ぎて、石薬師のむまやにて、晝のかれいひつかひて、庄野龜山のむまやくもうち過れば、日もかたぶくころになりぬ、猶行きくつて關のむまやちかくなりぬれば、日も暮ぬ、川水に月かけの清くやごれるを見て、

すゝか川やそ瀬の波にせきこめて關のこなたにすめる月かけ

十三日

けふも、きのふにおなじく、そら晴れぬ、明方に關のやどり立出しに、ほごなく、筆捨山といふ處にきたりぬ、この山は、むかし、狩野何某が畫にもうつしがたき風景なればこて、筆捨てたりといひ傳へたる、げにたゞめる巖のけしきなど、見所あり、やうちながめてゆくほどに、坂の下のむまやにきたりて、あはしやすらひ、すゝか峠を越るこて、



すゝか山きり立こめてたび衣ぬれそふつゆをはらひかねつる  
ほごなく、田村川さいふをわたりて、土山につきぬ、こゝにて、ひるの  
かれいひつかひて、松の尾川さいふをわたれば、右のかたに布引山  
をうちながめつゝ、水口のむまやもすぎて、横田川さいふをわたり  
て、日のかたぶくころ、石部のやごりにつきぬ、

十四日

きのふにおなじく、そらはれぬ、辰の刻ばかりに、石部のむまやを立  
出で、草津にゑばしやすみて、猶行きくゝて、瀬田の長橋をわたる、湖  
目もはるくゝに詠られければ、

音もせでさゝなみよする鳩の海や夏をよそなる風のすゝしさ  
三上山幽に見えて、ながめはあかぬものから、あすはみやこにいづ  
れば何くれこ心いそがれて、未満るころ、大津のやごりにつきぬ、

十五日

けふは、みやこに出なんここのうれしければ、夜をこめて、大津のむ  
まやたちいでぬ、一里あまりゆきしに、松山につゝじの花の今を盛  
りこさきしを見て、

来て見れば今を盛りのいはつゝじいはねご春の色ぞのこれる  
ほごなく、都にいでゝ、三條の橋をわたれば、大路をゆきかふ人のさ  
まも、ひなのなが路をすぎきぬる目には、いこめつらし、今出川の御  
館にまゐりつきぬれば、

おほおば君の、日ごろまちかねたまひけむ御けしきにて、いごうる  
はしく、いろくゝのさかなごもの御まうけありて、おほみきたまは  
りける、おんいつくしみのかたじけなさに、  
けふこゝにたび路のうさも忘られて君の情をあふぐうれしさ



けふは今宮のまつりのよし、きこえさせ給ひければ、  
めぐり来てけふいかなればいま宮の神の恵にあへるわが身ぞ  
夜に入りぬれば、月がけのさやかにすめるを見て、東の方のいご、  
おもひ出られて、こゝろのうちに思ひつゞける、

すむかげはいづくのそらもかはらねど都の月を君に見せばや  
御物語はつきしなけれど、あやにくなる夏の夜の、ほごなく亥過る  
ころにもはやなりけむ、御いごままをして、御館を立出で、丑滿つこ  
ろに伏見のやごりにつきぬるに、なほそら晴れて、月のさやかなれ  
ば、うちも寝られぬまゝに、

十六日  
明る夜も知らでながむる月影にふし見の里は名のみなりけり

ひるごろもおもふほごに、伏見のやごりを立いで、ふねにのり

て、淀川をくだる、淀の水車を見て、

ごここはにめぐる車はくちもせていく代馴らんよごの川水  
くだりゆくまゝに、日も暮ぬれば、今宵は枚方といふところに、ふね  
をつなぎぬ、川つらの月を見て、

見るまゝに夏をよそなる淀川やきよきながれに月をやごして  
十七日

あかつきに枚方を舟出して、ひるごろ、大坂につきぬ、  
十八日

大坂にあり、よべより雨ふりつゞきて、難波わたりの月も見えざり  
ければ、

いご、なほ旅のやごりのさびしきにあはれをそふる夕暮の雨  
ながめんご思ひし夜半のかひもなく難波の月は雲にへだて、



十九日

きのふの雨をやみなくふる、明方に大坂のやどりたちいで、西の宮のむまやに、あばしやすみて、二里あまりゆきしに、そらよく晴れぬ、このわたり、岸和田といふ處なり、人々のいひければ、

音もせで、あら波よするきしの和田いり日も遠くうかぶ夕なきほごなく、兵庫のむまやにつきぬ、

廿日

そらくもりぬ、卯の刻ばかりに兵庫のやどりをたちいづ、一の谷を通りすぎて、舞子の濱といふ處は、あまたの松枝をたれて、ひろき真砂ちりなうして、けしき又たくひなければ、この處にあばしやすらひて、

真砂路によせくる波のはまきよみみるめにあかぬ松の村たち

すこし行きしに、道の側に日向大明神とて社あり、たるみの神とてなん申すよし聞えければ、

あふげなほをさまる御代はつきせじと跡をたるみの神の玉垣ほごなく、明石のむまやに來りぬるに、そらはれぬ、淡路島をうちながめて、

あかしがたきりも波路にきえはて、ながめぞあかぬ淡路島山行きく、て申の刻ばかりに、加古川のむまやにつきぬ、

廿一日

けふも、そらくもりぬ、あかつきに加古川をたちて、姫路のむまやにて、ひるのかれいひつかふうちに、そらよく晴れぬれば、道のほごも、いごあつくなりぬ、あばし松の木蔭にやすらひて、

たび衣いざ立ちよらんあつさをもわするばかりの松風のこゑ



ほごなく、鵜のむまやもうちすぎで、室山をこゆれば、申の刻にもなりぬ、室の津には、むかひの船ごも、あまた來つごひて待つめり、この處は、室の明神の宮居たふごく、むかし、わがこのやしろにまうでし、こご思ひいで、なほ船路をいのるごて、

はるぐの海路のすゑの波風もつゝがなかれごいのる神がき暮過るほごに、室を船出して、坂越の湊に戌過るころつきぬ、

こよひはもさこしの浦に船よせて波のうきねに夢もむすはず

廿二日

卯過るころに、さこしのみなご船出せしに、そらよくはれて、海づらのけしきもよければ、

あら驚のゆくへもみえて海ばらやあほ路はるけき沖のしま山こぎいで、ごまりはいづこ白波のしづけき浦に船やつながむ

風もなく、終日おし船にて、申過るころに、備前の國出崎ごいへる湊に船つなぎぬ、

廿三日

夜をこめて、出崎のみなご船出せしに、けふもきのふのそら猶はれて、卯過るころに、葛しまごいふ處に、あばし汐かぶりして、

雲きりも波路のすゑに消えはて、あさひはれたる遠のしま山巳の刻ごも覺しきころ、葛しまを船出してゆくほごに、風もなく、なみもおだやかなりければ、おしふねにて、日のかたむくころに、備中の國白石ごいふ湊に、船つなぎぬ、

廿四日

きのふにおなじく夜をこめて、あら石の湊をいで、そらくもり、風もなければ、けふもおしふねにて、備後の鞆を過れば、阿伏兔ごいへる



處あり、こゝは海にさしいでたる巖のうへに、船路をまもらせ給ふなる、觀世音を安置せり、人をしてまうでさせ、ふねのうちながら伏しをかみて、

海原やふかきちかひをいのるかなわたる船路の浪もたひらに夜明たて、風すこし吹ぬれば、帆をあげぬれど、若ばしがほごにて、風もやみぬ、猶おし船にてゆくに、若ほのむかひぬればごて、ひるごろごおぼしきころ、豫州の大泊といへる湊に、若ばしいかりをおろしぬるに、小雨ふりいでければ、

をちこちの見るめにあかぬ島山もふる五月雨の雲にかくれて未過るころ、若ほもかなひぬごて、ふねを出して行けば、雨もやみぬ、酉過るころに、安藝の國御手洗といへる湊に、船つなぎぬ、

廿五日

卯過るころに、御手洗の湊をいづ、そらよくはれて、海の面もおだやかなれば、

あさなぎにこぎ出て見れば海原やのごかにうかぶ沖のつり船一里ばかり行しに、風すこし吹ぬれば、帆をあげて行く、若ばらくして、又風やみぬれば、おしふねにて、未過るころに、興居島といへる湊に、ふねつなぎぬ、

廿六日

夜をこめて興居島いで、そらよくはれ、追手の風ふきければ、帆をあげて、長濱といへる處にきたりしに、風もやみ、若ほもむかひぬれば、けふは、このころに船つなく、波もしづかに、眺望もかぎりなし、

ふねよせて海原さほく見わたせば夕日をひたす沖つ若らなみ  
廿七日



けふは、きのふのそらに引かへて、風はげしく、雨も去のをつくがこ  
こくなれば、船出すべくもあらず、日も暮ぬれど、風猶はげしく吹て、  
雨もをやみなくふりて、いつ晴るべきとも覺えざりければ、

廿八日  
ふるこてもほごそあらぬ長濱やながあなさせそ五月雨の雲

けふは、きのふに引かへて、夜明がたより、そらよく晴ぬれば、辰の刻  
こ覺しきころに、長濱を船出せしに、追手なれば、船子ごもいさみて、  
帆をあげぬるに、去ばしがほごに、三机のみなごもうち過ぎ、二間津  
こいへる湊にきたりぬるに、佐賀の關の山もみえければ、

廿九日  
はからずもけふの追手にわが國の馴し山邊をみるぞうれしき  
日もかたぶくころ、風もをやみぬれば、けふはこの湊に船つなぎぬ、

辰の刻こも覺しきころ、二間津の湊をいで、そらよく晴れて、すこし  
押し船にてゆくほごに、またおひてになれば、帆をあげぬるに、なほ  
風をやみなく吹て、名におふ硫黄灘をも、やすくここえぬれば、う  
れしきあまりに、

あふげなほ神の惠のかしこくて船路もやすくけふぞこえぬる  
午過るころに、鶴崎の川口に入り、去ばし汐をまちて、

うれしやな風にまかせて鶴崎にけふつくべしと思はざりしを  
申すぐるころに、船よりあがりて、鶴崎の館につきぬ、このほごは、な  
みのうきねに、いを安く夢をだにむすばざりつるに、

六月朔日  
鶴崎のつるの千こせもたのもしく今宵うれしき夢やむすばん

午過るころ、鶴崎のやどり立ちいでしに、そらくもりて、小雨ふりぬ、



二里ばかり行きて、八幡田てふ處に來りぬ、この處に川あり、うちわたりて、

この川の清きながれにおのづから夏ともあらぬ風のすゞしさ申過るころに、野津原のむまやにつきぬ、

二日

けふも、きのふにおなじく雨ふりぬ、明け行くそらもくもりて、時もさだかならねど、卯過るころ、野津原のこまり立ちいでぬ、ゆくさきの四方山雲かゝりて、見もわかねば、

やまぐのふもともそれとわかぬまで幾重かうづむ峯の白雲さいひつゝ、行くほごに、黒都甲といふ所にきたりぬ、こゝは山中なれば、さらでだに山きりふかき處なるに、けふは雨ふりて、雲はゆくさきの道をうづみて、たごるばかりなれば、

天ぐものいく重うづみて黒都甲みちわけわぶる旅のころも、この黒都甲といふところは、道の側に櫻あまたありて、春のころはいごめでたし、去年この處さほりしは、彌生の末なりければ、花ものこりたれど、こごしは青葉のみしげりぬるを見て、

去年の春めでし櫻もけふみれば、青葉にのみぞしげりあひぬる、又も來てかならずめでん山ざくらちぎる色香の春をわするな、猶行きくしに、道のあしければ、おもひのほかには、ひまごりて、申過るころ、からうじて、久住のこまりにつきぬ、

三日

けふも、きのふのそら晴れやらで、雨ふりぬ、久住のこまりたちいで、すこし行くほごに、あら糸の瀧こて、いと清き瀧の落るを見て、

玉ごのみ落ちて岩間にくだけつゝ、つらぬきあへぬ瀧の白いこ



此處たちて、一里ばかり行きければ、三本松といふところあり、三本の松のおそろず榮えぬるを見て、

いく千代の春をかさねて三本なる松のみぎりの色をそふらむ猶ゆきしに、雨もやみて、そらはれぬ、坂梨といふ處にきたりぬ、こゝはむかしより、國府のかために關するゑて守らしむる、はこねにおこらぬけはしき坂道なれば、

いかなればこゝをば昔し坂なしの里とは誰か名づけそめけむこのところ越えぬれば、國府もちかくなりぬこて、人々のいさみよろこぶを思ひやりて、

みな人のいさむ心も知られけりわがふるさこに歸ると思へば猶ゆくほごに、阿蘇山を左にあふぎ、阿蘇の宮を右にをがむ、この阿蘇といふは、山上に池ありて、常にけぶりたちてもろこしまでもき

こえし名山なり、けふは雲かゝりて、けぶりも見えず、

名にしおふ御嶽も雲につゝまれていづれ煙こわきて見るべき宮居をはるかに拜して、

わが國のまもりの神のみや柱うごきなき代にあふぐたふこさほごなく、日も入りぬ、ほたるの道すがら飛びかふを見て、

ゆくさきもおのがひかりに照らしつゝ、玉こ亂れて螢こびかふ内牧ちかくなりぬるに、山のみねに、月かげのすこし雲間より見えければ、

あすはまた越ゆべき山の峯なれや雲のたえまに三日月のかけ酉過るころ、内牧のやごりにつきぬ、

#### 四日

ほのくゞこ明けわたるころ、内牧のやごり立出でしに、そらよく晴



れぬ、こゝに千丈無田となんいふところありける、阿蘇の御たけの麓にて、常に此處をさらず、鶴のすめるこいふを聞きて、

千早振神のありけん阿蘇の山ふもこの田鶴もいく代へぬらん  
ほごなく、的石といふにきたり、あはしやすらひて、二重の峠を越れば、熊本もさだかに見えて、いさうれし、

はるくの旅路のうさもけふのみと思へばいさ嬉しかり  
未過るころに、大津のやごりにつきぬ、あすは熊本につきなんこのうれしければ、

あすはいさ雲吹きはれよすみ馴れし山への月の影をはや見ん  
五日

けふは熊本につくべければ、心いそがれて、夜をこめて、大津のやごり立出でしに、そら曇りぬ、二里ばかりゆきて、三の宮といふに、あは

しやすらひて、

立かへり又この神のみづ垣をけふあふぎ見るこごぞうれしき  
已過るころに、熊本につきぬ、

つゝがなくいく海山をこえつるも神と君とのめぐみなりけり



陽  
春  
集  
を  
は  
り

附  
録

齊護卿遺事

一、齊護卿の寛洪大度におはし、徳量のほどをたごへ奉らんはいともかしこかれど、所謂洋々たる大江の濁すどもにごらす、澄せどもすますといふべき有様になんおはしましける、まづ、近うつかへ奉る男女にかぎらず、殊遇特愛の目ざましかる事もあらざれば、又不慮に職を褫かれ、避に身の品貶されて、宛苦に沈めるものも聞えざりけり、近侍のみまかあるにあらず、大臣をして用ひざるに、恨ましめずといへる聖旨にも叶はせ給へる事どもぞ、おはしましける君の徳量のかくあらせられしかば、當時の諸大名にして信じ慕はせ給ひしかた人も多かりけらし、近頃京師守衛として、諸大名及び諸藩士上洛せるに、我藩士の内、伊豫の宇和島侯の見参に入りし者の有けるに、侯の曰く、そこが先君と吾と才の程較べたらむに、さまで劣るべうは、覺えねど、徳量におきては、梯たて、も及びがたかりける君にておはしけるよと、かへすくのたまひしとぞ、此侯は諸大名の中にも、殊に蒙邁の聞えありけるに、かくしものたまへるは、實に信服せられし事どものおはしましたるにこそあめれ、凡そ寛洪簡重の徳を以て、三十年餘